

英米ジャーナル *The Eibei Journal*



(2018年度・米国UCLA英語研修の初日)

明海大学 外国語学部 英米語学科

2018年度 学科活動報告

目 次

英米語学科教員からみなさんに贈る言葉.....	1
我々はどう学ぶべきか.....	1
2018 年度英米ジャーナル刊行に寄せて.....	3
英米語学科ゼミ（専門領域研究講座・卒業研究）紹介.....	4
津留崎毅ゼミ.....	4
大津由紀雄ゼミ.....	7
河原伸一ゼミ.....	10
金子義隆ゼミ.....	12
川成美香ゼミ.....	16
熊谷学而ゼミ.....	20
ジェシー・グラスゼミ.....	22
小谷哲男ゼミ.....	24
小林裕子ゼミ.....	25
嶋田珠巳ゼミ.....	28
高田智子ゼミ.....	32
高野敬三ゼミ.....	34
瀧田健介ゼミ.....	38
内藤貴子ゼミ.....	42
ケイコ・ナカムラゼミ.....	46
原和也ゼミ.....	50
松井順子ゼミ.....	53
卒業研究題目一覧.....	55
2018 年度 英米語学科 卒業論文発表会.....	62
海外英語研修.....	63
CQU(オーストラリア).....	63
UCLA (アメリカ).....	66
カンタベリー・クライスト・チャーチ大学(イギリス).....	79
アルバータ大学(カナダ).....	84
GSM フィールドワーク参加報告.....	86
複言語・複文化教育センターの活動報告.....	94
第 11 回明海大学英语スピーチコンテスト報告.....	101
英米語学科同窓会 明英の活動報告.....	106
卒業生からの手紙.....	107
編集後記.....	109

英米語学科教員からみなさんに贈る言葉

我々はどう学ぶべきか

～何になりたいかではなく、どうありたいかを考えよう～

英米語学科主任 小林 裕子

英米語学科在学生の皆さんの情熱を込めた原稿がこのようにして「英米ジャーナル2018」としてまとめられ、多くの方々にお読みいただけることを大変嬉しく思います。

「専門領域研究講座」「卒業研究」の紹介にとどまらず、奨学研修、短期語学研修、GSM フィールドワークに参加した皆さんの体験談、そして卒業生からのお便りなど多彩な原稿をお寄せいただいた皆様のおかげで、こうして今年も出来上がった「英米ジャーナル」は、明海大学外国語学部英米語学科に積み上げられ続ける大切な「記憶」となります。

さて、今回は AI にも感応してもらえるようにまずキーワードを挙げ、それに沿った文章を書いてみたいと思います。学んでいくことは手持ちの知識を繋げていくことであると私は考えていますので、キーワードを繋げるように皆さんにも読んで頂きたいと思います。



【99% 1% 動物 人間 福沢諭吉】

99%と 1%と聞くと、グローバル化が進む世界経済の現状を連想するかもしれません。世界の富の多くを極少数の人が独占している状況を表現する数字であると考えられる向きが多いでしょう。『学問のすすめ』の中で福沢諭吉が述べている言葉に示唆深いものがあります。人間が衣食住を得るのは、既に自然の手によって 99%完成しているところへ、人の力で最後の 1%を加えただけである、というのです。私たちは衣食住を満足させようとしているけれども、この程度であれば、動物も同じことをやっている、とユーモア

たっぷりに述べています。衣食住を満たすだけでは、万物の霊長たる人間としての目的を果たしたものとは言えない、とも述べています。どのような1%を加えることができるかは、私たちの学びの本質にかかっています。

【GPA 北極星 路線図 神谷町 六本木】

数年前のゼミ生が就職活動で忙しく飛び回っていた時の事です。神谷町から六本木への行き方を検索しようとしていました（授業中！！）。ここで私が怒るポイントは二つあります。一つ目は授業中に携帯に触れること、そして二つ目は神谷町と六本木は東京メトロ日比谷線の隣の駅であるということです。携帯にありとあらゆる事柄を処理してもらう生き方は少し考え直す必要があります。就職活動を迎えるにあたり、都内の地下鉄路線図くらいは情報として頭に入れておくのは社会人の第一歩でしょう。電車の乗り継ぎの仕方を携帯に教えてもらう大人って情けないと思いませんか。自分の進む道は自分で考え、自分で選択しましょう。地下鉄路線図はどの駅にも置いてあります。首都圏の全ての路線が5cm×7cmほどの二次元空間に表現されています。携帯に頼らず、新宿3丁目から表参道まで乗り換え一回で行けるようになったら大人の仲間入りです（ちなみに赤坂見附で乗り換えましょう）。かつて大航海時代には、航海者は沿岸から離れて大海原に漕ぎ出すとき、太陽や北極星の高さを観測し緯度を知り、操舵を操っていました。私達もGPSに導かれるのではなく、志を高く天空を臨みながら進路を定めましょう。

【就職 選択 本質 哲学】

大学生が2年生の終わりを迎えるころには「そろそろ就職のことを考えてみてね。将来、何になりたいの」と何度も先生に聞かれるでしょう。ホテル、空港、IT、アパレルなど選択の幅が広すぎて「何になりたいかまだ決まっていません」と答えれば、「早く決めてね」と返されるでしょう。ヨーロッパでは「何になりたいか」ではなく「どうありたいか」を考えるように教育されるそうです。ただ衣食住を得るためではなく、数字だけでは意義づけることができない哲学的な視野を持って進みましょう。小林秀雄は「やさしいことはすぐつまらなくなります。そういうふうに人間の精神はできているんです。子供の喜びとは違うのです。」と著しています。困難を伴う学びの先に、私たちが、「どうありたいか」が見えてきます。北極星を見失わずに進みましょう。

2018年度英米ジャーナル刊行に寄せて

外国語学部長 高野 敬三

2018年度の学科活動報告である英米ジャーナルは、各先生が担当されている専門領域研究講座や卒業研究で学生の皆さんがゼミ担当の先生方の下で、どのような研究をしているのかがよく分かる報告書となっております。2年生が3年からのゼミを履修する際の、貴重な参考資料ともなっております。そこでは、学生の語る内容をとおしてゼミの内容や担当教員の個性がよく表れています。今年度も英米語学科の各ゼミからメッセージが届いています。

こうしたゼミ紹介としての側面と英米語学科の学生が卒業までに体験する就職活動体験やボランティア・インターンシップなど様々な英米語学科の事業などが豊富に掲載されています。

卒業生の皆さんは、社会に出てからも自分の軌跡を振り返ることのできる本報告書を是非、時折、目を通して学生時代を思い出してください。

在学生の皆さんは、時に本報告書を読んで、本学英米語学科を卒業するまでの自己の未来である「行く末」を考えてほしいと願っています。

時代は、英語教育の大変革期を迎えています。小学校、中学校と高等学校の英語教育が変わります。大学教育もその変革の波を必ず受けていかなければなりません。これまでの明海大学外国語学部英米語学科の教育も時代に即応した内容とする時機を迎えています。

これからも、英米語学科の教員は、学生第一に考え、より一層、英米語学科の教育を改善していきます。学生の皆さんも、是非、時代の変化に敏感に対応していただきたいと切に願っています。



英米語学科ゼミ（専門領域研究講座・卒業研究）紹介

津留崎毅ゼミ

専門領域研究講座



2018年度の津留崎ゼミ（専門領域研究講座）の受講生は、上田莉香子さんと堀内のり子さんの2名だけでした。小人数と言うこともあり、大部分の授業を津留崎研究室（1705）で実施しましたが、2人の出席状況は良好で、欠席ゼロだったと記憶しています。

津留崎ゼミでは、成績評価の条件として、ゼミ論の提出を課していますが、2人とも期日までに、それなりに整った内容のゼミ論を提出してくれました。ゼミ論のタイトルは、以下の通りです：

- ・ 上田莉香子「日本語における『ひとを指すことば』の研究 ～となりのトトロの英語字幕と日本語の字幕を比較して～」
- ・ 堀内のり子「日本語と英語の字幕研究—『ティンカー・ベル』—」

3年 上田 莉香子

私たち津留崎ゼミ「専門領域研究講座」では、「代名詞の解釈について」をテーマに津留崎先生、私たち2人で1年間取り組んできました。少人数だったため、講義は先生の研究室で行い一人一人に向け丁寧に教えてくださりました。

前期は、The Cambridge Grammar of the English Languageの17章”Deixis and anaphora”について取り組みました。最初は「直示」と「照応」という言葉を聞いたことがなくて不安でしたが、先生がわかりやすくハンドアウトを作ってください徐々に理解できるようになりました。また、夏休みの課題として、「ことばと文化」のブックレポートを作成しました。

後期は、前期に学んだ直示と照応に関する知識を活用して、Bach Peters Paradox（バック・ピーターズのパラドックス）について考察しました。後半には、ゼミ論を書くためのテーマ決めや津留崎先生のアドバイスをたくさんいただきました。津留崎ゼミで良かったです。1年間ありがとうございました。

卒業研究



今年度の津留崎担当「卒業研究」の受講生は、名簿上17名だったが、最終的に課題（卒業論文もしくは卒業レポート）を提出して単位を取得したのは、16名だった。（16名が提出した卒業レポートのタイトルについては、別ページ参照。）

今年度は、残念ながら、在籍した学生による「卒業研究紹介文」が間に合わなかったた

め、2017年度卒業生（崎山日菜子さん）による紹介文の一部を以下に掲載して、それに代えることにする。

***** 崎山日菜子さん（2017年度卒業生）による紹介文（抜粋）*****

私は、3年次に津留崎ゼミで「人や物を指すことば」について学び研究する機会がありました。そして、4年次のこの卒業研究では、3年次に学んだことを生かして卒業レポートに取り組みました。

いきなり、卒業論文・卒業レポートを書きなさいと言われても、何をどんな風に行けばいいのか、最初に何から手を付けていけばいいのか私はわからず戸惑いました。しかし、この津留崎ゼミではそんな心配は一切ありません。授業の中で津留崎先生が一から卒業論文・卒業レポートのいろはを教えてくださいました。（...）そして、自分の興味関心のあることについて執筆を進めていきます。興味関心のあることといっても津留崎ゼミでは「ことば」についての研究が必須条件でした。「ことば」についてと言われても何を書いていいか悩んでしまうと思います。しかし、その都度津留崎先生が「こんなのはどう」とハンドアウトを配ってくれ、そこから派生して自分の身近なものや自分の好きなものにことばとの共通点を見つけ、みんな最後には、自分自身の個性にあった論文やレポートを完成させていました。

（...）

卒業レポートを提出してみて、一つのレポートを完成させるのにこんなにも時間を費やし何冊もの本や論文を読んだのは初めてでした。何度も何度も添削やアドバイスをもらいながら完成をしたレポートは今まで他の授業で書いたレポートとは比べものにならないくらい自分でも納得のいくものになり、充実感でいっぱいです。



大津由紀雄ゼミ

専門領域研究講座

3年 山田 実紀

私たち大津ゼミでは、「RED」という短編小説の文と文章の構造について学んでいます。「RED」で使用されている単語はあまり難しいものではないのですが、1文1文がたくさんの知識を得ることができるような構造になっているため、1冊読み終えたときにはかなり語学力を向上させることができます。この本は男性2人と女性1人が登場する物語なので、男性でも女性でも登場人物の気持ちになって読み進めることができますと思います。ラストがもどかしい形で終わるので、この後どうなったのか、を自分たちで考えるのもこの本の面白さなのではないかと思っています。

授業では、紙の英和辞典と英英辞典、さらには文法の参考書も使用するので、受けていくうちに授業外でも辞典を引く習慣がつかます。ゼミが始まったばかりのときはみんなに紙の辞書を引く習慣がなかったため、先生に辞書引いてと言われるまで引かなかったのですが、最後の方の授業では分からなかったらすぐにみんな辞書を引くことができるようになっていました。

また、ゼミ生が少なかったので分からないことや疑問点はすぐに先生に尋ねることができました。こんなこと聞いてもいいのかな、と不安になるような基礎的な質問でも大津先生は丁寧に答えてくれます。私は基本的に大教室の講義では自分から発言することができないタイプなのですが、ゼミ内ではきちんと発言することができていました。

さらに授業内では大津先生が「ことば」についての豆知識をお話してくださるので、たくさんの情報を身につけることができます。私は専攻がELMでないので授業で言語やことばについて学ぶ機会がなかったため、新しい知識を得ることができてとても有意義な時間でした。



大津ゼミに入ったら、ELMの人でも GSMの人でも1年でとても成長することができると思うので、私は大津先生のもとで学ぶことをおすすめします。



卒業研究

4年 東 奈菜美

こんにちは、今から少しばかりではありますが大津ゼミの卒業研究について紹介させていただきます。現在、大津ゼミの4年生で卒業研究を進めている学生は10名です。実際にゼミに入らないとわからない部分も多々あるとは思いますが、わかりやすく、魅力的に紹介できるよう心がけましたので、深い部分を感じ取っていただければと思います。

ゼミの活動内容

専門領域研究講座を終えた私たちは卒業に向けて卒業論文作成に進みます。大津先生のゼミを継続した場合、先生も私たちのことをとても理解してくださっているため、卒業論文のテーマ決めなどにととても的確で私たち一人ひとりにあった意見をくださります。

さらにテーマに関しては制限がなく、自分の好きなこと、興味のあること、そして訴えたいことなど自由に書くことができます。もちろん3年次に学んだ“中学生のための英語

学習参考書の作成”についてさらに深く掘り下げ研究テーマにすることもできますよ！

大津ゼミにおいて学生が率先して決めることが多いため、仲間たちと意見を交換し、まとめる力もつきます。卒業論文の書き方などは一から教えていただけるので、何一つ不安になる必要はありません。楽しい、為になる大津ゼミにぜひきてください！



大津ゼミ受講生の卒業論文テーマ一覧

- ・ 中国経済のこれから
- ・ サンタクロースはいるのか
～信じる心～
- ・ 社会への出方
～日本とアメリカの差って？～
- ・ 日本人は英語が苦手か
- ・ 世界のファッション
- ・ 少子高齢化社会の過去と未来
～日本の人口推移から考える～



↑

インフルエンザにかかってしまった学生がたくさん出てしまい少人数になってしまいました^^;

河原伸一ゼミ



3年 三浦 江梨花

河原ゼミは、ゼミの名前だけを見ると難しいことをするのかなと感じてしまうかもしれませんが。実際はそんなことはなくて、河原先生は私たちゼミ生の意志を大事にしてくれていると思います。私たちがやりたいと思っていることを率先してやってくれます。また、先生はこれから私たちに必要になるものを考えてゼミをしてくれます。また、ゼミを重ねていくたびに他のゼミ生と仲良くなっていきました。他のゼミよりも話す機会が多いと思います。河原ゼミは一番楽しいゼミだと思っています。

3年 坂本 仁唯奈

河原ゼミでは、先生の広い人脈を活かし、普段、私たちがなかなか会うことができない社会の第一線で活躍している方々から直接お話しを伺える貴重な機会があります。去年は、国会議員、県議会議員、市議会議員、有名企業の社長、日本郵便役員、ファイナンシャルプランナーの方々と意見交換する機会がありました。また、毎週読書をした本をゼミ生に紹介し、意見を交換する場があります。今まで読書をしてこなかった私にとって最初は時間がかかり大変でしたが、読書をすることによってポキャブラリーが増え、意見を交換することで友人の考えが聞けたことで刺激になり、様々な角度から物事を見られるようになりました。これらの有意義な活動を通して、就活に役立つ知識を得られ、自分の成長に繋がるゼミだと感じています。

3年 杉浦 孝佑

私が河原ゼミに入って学べたことは、幅広い知識の必要性和それをどう活かしていくかということが一番大切だということです。学生のうちではなかなか経験することのできない経験をすることが出来るのが河原ゼミの特徴であり、他のゼミにはないものの多くを学ぶことができました。先生には勉強はもちろんのこと様々な相談に乗って頂き、ゼミをゼミ生1人ひとりに合わせたものにしてくださり、ゼミ生がやりたいことなどを積極的に取り入れていただけたことで最も成長を感じられる授業になっています。

3年 長谷川 裕晃

就活だけでなく、人間的に、文化的に成長することができます。就活前に自分をレベルアップさせたいという方には、是非河原ゼミをおすすめします。

3年 宗形 萌里

河原ゼミに入って、自分の考えを伝える力が以前より身についたように感じます。また、他の人の意見を聞くことで、新たな気づきを得ることができ、とても役に立ちました。

3年 住吉 咲紀

私は、河原ゼミに入ってから多くの出会いを経験し、その中でいろいろな意見を聞きくことにより、多様な価値観を得ることができました。そしてそれを今の就職活動に活かすことができています。河原ゼミから得るものはとても多く、必ず自分の成長に繋げることができるゼミだと感じました。

3年 釜田 彩花

大学では先生など限られた人にしか会うことはできませんが、河原ゼミでは普段なかなか会うことのできない有名な社会人にお会いする機会があり、貴重なお話を伺うことができます。このような、他のゼミではできない経験に魅力を感じました。私がこのゼミに決めた大きな理由の一つです。

金子義隆ゼミ

専門領域研究講座

3年 桑田 郁

金子ゼミでは、英検対策や英語教育に関することを主に学びます。英検対策で writing のトピックを使ってディスカッションをし、実際に自分達で英作文を作成します。ゼミ生達で意見を出し合うので、自分とは違った意見や表現方法を知ることができ、表現力を培うことができました。また、社会的なテーマが多いので思考力も養うことができました。

英語教育に関する内容では、発問の意義や種類、リーディング方法など教職に関わるものを学びました。ゼミで学んだことを教職科目の授業でも応用できることが多くあり、ゼミ以外の時間にも知識を深められ、より発問の意義やリーディング方法について理解できました。

さらに、親しみやすい雰囲気先生なので分からないことを質問したり相談をしやすかったりするのも、金子ゼミの魅力の1つだと私は思います。もし、ゼミ選択に迷っていて自分の英語表現力を高めたいのであればおすすめのゼミだと思います。

3年 佐藤 光

金子先生のゼミでは英検対策や、リーディングの方法、発問の練習などを中心に活動しています。特に教育実習を視野に入れた発問の意義や種類を学び、それを元に実際にゼミ生同士でお互いに発問をし合い先生に添削してもらったことで、他の人の意見や考え方を常に共有することができ、教育実習に自信を持って活動していきたいと思います。また、ゼミで学んだことが他の教職の授業で出てくることがあったので、復習をしたり知識をより深めることができました。英検対策では英作文で点数を取るコツを教えていただいたり、2次試験である面接対策では英検に詳しい金子先生に注意点や、採点規準について質問することができました。授業中でも、こまめに質問する機会をくれるのでわからないことはその時に解決することができます。金子先生のゼミでは教育課程を履修していない生徒でも楽しく授業を受けることができると思います。面白くて理解のある先生なので、金子ゼミへいらしてください！

3年 佐藤 みゆき

金子ゼミでは第二言語習得理論に基づいた授業が年間行われます。このゼミは、第二言語習得理論を学びたい人はもちろん、英語を話せるようになりたい人や英語表現をもっと増やしたい人にも向いていると思います。前期は英検の writing、後期には英語教育に

ついて学びます。英検の writing は、英検準一級レベルの問題を取り扱います。最初はとても難しいと感じましたが、ゼミ生と意見を出し合いながら課題に取り組むことができました。ゼミ生と意見を出し合うことで、そんな英語表現もあるのかと毎授業学ぶことができました。英語教育では効果的な音読方法や生徒への動機付けを学ぶことができました。教職課程の授業と関連付けて学ぶことができたのでとても楽しかったです。金子先生はいつ、どんな質問をしに行っても嫌な顔をせずに丁寧で分かりやすく指導してくださいます。英語や第二言語習得に少しでも興味がある学生はぜひ金子ゼミに挑戦してみてください。

3年 山下 茉穂

金子ゼミでは第二言語習得や英語教育に基づいた授業が一年間行われます。具体的には英検の writing を書きそれを discussion したり、発問の種類についてプレゼンテーションをしたり、映画を英語で見えて意見交換したりなどしました。金子先生は答えを与えるのではなく、私達自身に考えさせてくれ、時には手助けしてくれました。自分が英語表現について悩んでいるときには丁寧に分かりやすく指導してくれます。もし英語で言いたいことをうまく言えなかったとしても金子先生が正しい英語にしてくれるので間違いを恐れずに話すことができます。ほかのゼミ生の英語も聞けるため色々な英語を知ることが出来ます。また、ゼミ合宿では、英語の勉強はもちろんテニスなどのスポーツも一緒に楽しみ、有意義な時間を過ごせました。あと、いつも金子先生は私達の話をお身に聞いてくれます。どんな話でも「なるほどね」って聞いてくれます。金子先生は英語以外の相談も乗ってくれるいい先生です。



卒業研究

4年 小川 隼斗

当ゼミでは動機付けのための英語教育という研究を行っています。私たちは動機付けをするにはまず楽しい授業が必要であると考えます。そして楽しい授業をするためにはどのような活動を取り入れていくかを参考書や実演を通して学んでいきます。実演をした後にはお互いにフィードバックを行い良い点と悪い点をまとめた上で反省を行い更に向上していきます。また、最終課題として中学校、もしくは高等学校での50分の授業を想定とした模擬授業を行います。決して楽なゼミではありませんが、自分が教育現場に立つ上での必要なものをしっかりと楽しく学べます。教職を志す人、将来的に誰かを指導する立場に立ちたい人は是非金子ゼミにご参加ください。

4年 小野 勝春

金子ゼミでは教職に関する事柄を中心に研究をしています。4年のゼミの活動は前期で生徒の深い学びを促す授業方法の研究を、そして後期ではゼミ生が各自で指導案を作り模擬授業を行うことが主な活動でした。前期にゼミ生が順番に生徒の深い学びを促すためにどうすれば良いか、それぞれ研究をして発表をしていました。後期では前期で発表された授業方法を参考に各自指導案を作成して模擬授業をしました。この模擬授業では前期の発表が良く反映され、高度な模擬授業であったと思います。金子先生はとても温かく親切丁寧にして熱心にゼミ生に道を指し示すことの出来る先生で、所属するゼミ生のみならず、互いに切磋琢磨しあえる大切な仲間を持つことができました。教職を目指す人には是非とも入って頂きたいと思える、素晴らしいゼミです。

4年 篠原 百合香

金子先生はMETTSに所属しているので、学生は教職課程を履修している人が多いです。授業内容と致しましては、主に金子先生の研究テーマである「動機づけ」を元に生徒がやる気を出して授業に臨むにはどうしたら良いか、またその授業方法等を学んでいます。また、前期では教育実習のサポート、後期では卒業論文の代わりに指導案を作成し模擬授業を行います。金子先生は学生の話をしっかり聞いて下さり、分け隔てなく接してくれるとても優しい方です。教職課程を履修している学生が多いと申し上げましたが、「人に何かを教える」という事は教員でなくとも社会に出て役立つ事です。ですので、教職を履修していない方も大歓迎です！もちろん、英語が苦手でもしっかり教えてくれます。先生もメンバーもとても明るく、個性豊かで雰囲気の良いゼミでした。

4年 鈴木 海優

金子先生のゼミでは、最終目標である指導案を作成し、50分間の模擬授業を行うために学習指導要領の重要なポイントを学び、授業で行う活動やパフォーマンステストについて1年を通して学びました。授業のスタイルとしては、割り当てられた教科書の範囲を担当の学生がまとめてきて、授業内でまとめてきたことを発表することが多かったです。また、まとめてきた中に活動が紹介されていれば、担当者が教員の役になり、他の学生が生徒役になって実際にその活動を実践してみるなど、学生が中心となって活動する時間が多く、とてもアクティブな授業でした。模擬授業を始め、教員役と生徒役に分かれて授業の一部活動など学んだことを実践する機会が多くあるのが金子先生のゼミの特徴であり、教職課程を履修している学生にとって更なる学びを深める場となりました。

4年 湯谷 葵

金子ゼミでは、主に教職課程に基づいて取り組んできました。わたしは四年からこのゼミに入ることになりましたが、金子先生を含め、ゼミ生の皆も快く受け入れてくれました。後期のゼミでは、教科書に基づく発表を行ったのち、模擬授業の発表に向けて単元計画を立てました。以前教職課程を履修していたものの、学習指導案や模擬授業を行ったことがなかったので、一人だけ未経験の中不安でいっぱいでしたが、金子先生が一から作成方法を教えてくださったのと、ゼミの仲間たちがフォローしてくれたこともあり、無事に模擬授業を行うことができました。英語の教員を目指している人だけでなく、英語を教えることに興味があるのであれば、金子ゼミはとても良いと思います。少人数だからこそ、お互いを高め合えるのも良い点だと思います。



川成美香ゼミ

卒業研究

4年 二平 みなみ

言語や文化について深く学ぶことができる川成ゼミについて紹介します。川成ゼミでは、「社会言語学」をテーマとして、主に日英語の会話パターンや男女差、若者ことば、言語習得などを研究しています。「卒業研究」は、3年次の「専門領域研究講座」から続く必修授業科目です。メンバーは、基本的には変わらず4年次でも研究を共にしていくので、切磋琢磨しつつ仲を深めることができます。

授業内容としては、まず3年次のゼミでは、「社会言語学」の知識を深めることから始まります。授業の進め方としては、教科書や論文の内容を、メンバーで分担して授業毎に担当者が内容についてプレゼンする形式です。プレゼンでは、図や表を入れたレジュメを事前に作成し、レジュメをもとに授業が進行していきます。レジュメ作成では、教科書や論文を自身で読解して要点をまとめると共に、他の参考文献などの知見も採り入れます。そのため、社会言語学を深く学べることに加えて、WORDなどによる資料作成術などもスキルアップしていきます。3年次の最後には、各自が興味を持ったテーマでゼミ論を作成します。ゼミ論作成は、先行研究を検索し、独自のデータを収集し分析して、論文形式で執筆していくので、小論ながら4年次の卒業論文に向けてのはじめの一步となります。

4年次では、4月当初から卒論に向けての準備が始まります。前期では、3年次と同様に教科書の内容を輪読しながら、各自の卒論テーマを固めつつデータ収集をしていきます。卒論の中でも、データ収集は最も時間がかかる作業です。映画などの日英語のクリプトや動画、日本語の資料などに回数を重ねて向き合い、各自の分析対象とするデータを特定します。後期になると授業は図書館学習室で行われるので、学術ポータルサイトに容易にアクセスできるネット環境の中でさまざまな論文やデータをさらに見つけていきます。授業は、毎週の全体指導と、2週間に1回のペースでの個別指導があります。そこでは、先生からアドバイスや指摘をいただくことにより、新たな課題や視点が見いだせ、より深い卒論に近づいていきます。私は3年次のゼミ論から同じテーマで研究してきたので、卒論を書き終えた時には、これまで味わったことがない達成感を得ることができました。

川成ゼミでは、卒論を書いて終わりではありません。完成した卒論は、ゼミ内卒論発表会で共に頑張ってきたゼミのメンバーの前で発表します。お互いにコメントをし合うので、さらにより良い卒論の最終版を作り上げることができます。また、ゼミメンバーの卒論の詳細を知ることにより、お互いに圧倒されながら、たくさんの学問的刺激を受けました。

卒論作成という、難しくて固いイメージがあります。しかしながら川成ゼミでは、学期末や卒論発表会を終えた後には、大学内ニューマリNZや新浦安のホテルのレストランで懇親会をします。普段はしっかりと授業に集中しますが、懇親会では、美味しい食事を楽しみながら、川成先生とメンバーで談笑して仲が深まる時間を過ごしています。

私は、3年次のゼミに入った時からバイリンガルについて研究したいという気持ちが強く、ゼミ論文でも卒業論文でも研究対象としてきました。バイリンガルの研究は、社会言語学にも関連しますが第二言語習得の分野です。授業で扱うテキストや論文の他に、自分でたくさんの文献を調べる必要がありました。少し不安な気持ちもありましたが、川成先生からたくさんのアドバイスを頂きながら、20枚以上の卒論を書き終えることができました。一つのテーマを突きつめて卒業論文という形にすることができた今、その達成感は今後の人生に大きな自信となるものと確信しています。

最後に、4年間の大学生活をふり返ると、1年次クラス担任が川成先生であったこともあり、先生とは多くの繋がりがありました。1年次の授業では、WORD、EXCEL、パワーポイントを活用して、レポート作成やプレゼンテーション等を日本語と英語の両方で実践しました。そこで身についたスキルは、川成先生の「社会言語学ゼミ」でのプレゼンや論文作成にも大いに役立ちました。そのスキルは将来においても役立つ技術だと思っています。川成先生には親身に向き合っていただいたおかげで、私は充実した大学生活を送ることができました。心より感謝いたします。充実した大学生活を送りたい、何か自分の強みを見つけない方は、ぜひ川成先生のもとで学んでみてください。



図書館 MLC(Meikai Learning Commons)にて 2018年12月19日



「川成ゼミ内 卒業論文発表会」 2019年1月29日

専門領域研究講座

3年 菊池 凌平

川成ゼミは、ゼミに踏襲されているテーマ「ことばの使用を社会的・文化的視点から考える」を理解することからスタートします。ことばや文化というのは身近に感じられるものですが、社会言語学的事業のことばの捉え方とは学問的にはどういうことなのか。洋書の専門書 *An Introduction to Sociolinguistics. Vol 4.* (Holmes, Janet. 2013) の序論を読破することから始まりました。英語の専門書の文章を読解することは最初難しく感じられましたが、単に英文和訳をするのではなく、どのような言語現象を社会言語学では追及するのか具体的に考えながら進めていくうちに、興味が深まっていきました。ことばにはバリエーションがあって、言語の小さい単位からより大きな単位にまで存在するのです。発音や音声のレベルから、語彙・文法・談話のレベル、さらにはよりダイナミックにみると地方方言やある国の母語や第二言語に至るまで、ことばのバリエーションと捉えるのです。私はまずこの点を興味深く思いました。さらに和書のテキストも輪読しながら、さまざまな日本語や英語のことばの現象に注目して学んでいます。私は特に「方言周圏論」に関心があり研究テーマにしています。「方言周圏論」とは、方言の地理的分布はほぼ同心円をなし、文化的中心地付近に新しい言い方が広まり、遠い所に古い言い方が残るという考え方です。ヨーロッパでも20世紀初頭から同じような考え方があるそうです。日本では言葉も文化も全ては近畿の都から始まったという定説があります。私は自分の出身地と同じ方言が他の県にも存在することを以前から不思議に思っていました。これは方言周圏論に関係するのではないか？さらに調査を進めて卒業研究につなげていきたいと考えています。



勝浦ゼミ合宿 2018年1月30日ー2月1日

***** 以下は「2017年度卒業論文題目一覧」である *****
前年度『英米ジャーナル』では紙面の関係で掲載をすることができなかったので、
ここに記録する。ゼミ生後輩の皆さんの参考にしていただきたい。(川成)

「2017年度 川成ゼミ 卒業論文 題目一覧」

1. 時代ごとのディズニー長編アニメーションにみる英語における女ことばの変容
～『白雪姫』・『美女と野獣』・『アナと雪の女王』の比較～ ……秋山 聖奈 (26p)
2. 謝罪表現の日米比較
～映画テレビドラマからみるポライトネスの分析～ …… 安部 瑛梨奈(23p)
3. 日常生活の会話にみられる性差の研究 ～日米比較～ …… 安藤 洋介 (20p)
4. 日本語特有の表現が英語ではどう表現されているか
～「授受表現」・「人称代名詞」・「主語」・「時制」の4つの観点から…金子 実果子(27p)
5. 映画にみるビジネスポライトネス …… 木村 圭太 (23p)
6. ことわざの日英比較 ～フェイスの概念との関連性の検証～ …… 工藤 仁生和(23p)
7. 依頼、注意、謝罪の場面で使われる英語の丁寧表現にみられる性差
…………… 瀧野 紗来 (41p)
8. 英国貴族と使用人の女性らしさ
～『ダウントン・アビー』による女性語の研究…………… 深谷 律咲 (22p)
9. 褒めに対する受け応えの日英比較 …… 石田 優希 (28p)
10. 現代の言語表現に見られる性差
～ 日本語と英語を比較して～ …… 中島 実穂乃 (20p)

熊谷学而ゼミ

専門領域研究講座

身近にある名前を観察したり、歌や映画を視聴したりしていると、言語学的に興味深い現象がたくさん起きていることに気づきます。

例えば、「ハリー・ポッター」に登場する「ハリー」と「ロン」のそれぞれが話す「イギリス英語」はかなり聞こえ方が違いますが、日本人にとって、「ハリー」の英語は聞き取りやすいが、「ロン」の英語は聞き取りづらい印象を受けるかもしれません。これはなぜでしょうか。

あるいは、2016年の「ポケモンGO」のリリースにより、今やポケモンは子どもから大人まで幅広い世代によって親しまれていますが、ポケモンの名前のつけ方には、ある法則（傾向）があることは知っていますか。

本ゼミでは、音声学・音韻論の観点から、普段、何気なく視聴している洋画や洋楽の発音について研究したり、ネーミングの研究をしたりしています。



以下、ゼミ生、および、勉学に積極的で本ゼミに参加している学生のコメントを掲載します。

3年 中島 菜摘

熊谷ゼミでは、音声学・音韻論について学んでいます。音声学では、ハリー・ポッターを取り上げ、イギリス英語の特徴や方言について学び、研究をしました。音韻論では、専門的な視点から商品名や名前の規則性について学習しました。私たちのゼミでは、研究テーマは音声・音韻に関することなら英語に関係なくとも、自由に決めることができます。

私は前期には「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」を取り上げナイトバスの車掌の方言について研究をしました。後期には、韓国語における可愛いと感じる音について研究をしました。どちらの研究もやりがいがあり、先生が親身になって一緒に研究してくれたので楽しく取り組むことができました。映画や洋楽、イギリス英語の音声に興味がある方や名前の規則性などに関心がある方におすすめできるゼミだと思います。

3年 丹治 紘

ゼミの主なテーマは、音声学と音韻論です。音声学ではイギリス英語を中心に学び、イギリス英語とアメリカ英語の発音の違いなどを学び、音韻論では、男女の名前に含まれる音の違いやブランドや製品名における音声学的特徴などを学んでいます。その中で自分は音韻論を中心に勉強しています。研究内容としてはサラブレッドにおけるオスとメスの名前にみられる音の特徴などをまとめ、オスとメスでどのような差があるかなどを数値化して研究しています。ゼミ論文の提出などがありますが、先生が最初から最後までわかりやすく教えてくれるのでとても為になります。

3年 田中 純菜

私は、熊谷先生の授業でポケモンの進化前と進化後では、進化後のポケモンの名前には、有声阻害音が多く含まれているということを知りました。有声阻害音が多い方が強く聞こえるということです。そのことについて、私は悪役と悪役でない者とは同じことが言えるのかと気になり研究してみることにしてみました。そこで、私は、ハリー・ポッターに焦点を当てて、グリフィンドールとスリザリンで名前を調べました。まだ研究途中なのでこれからも調べていきたいと思っています。

ジェシー・グラスゼミ

専門領域研究講座

3年 BUI PHAM DUY SON

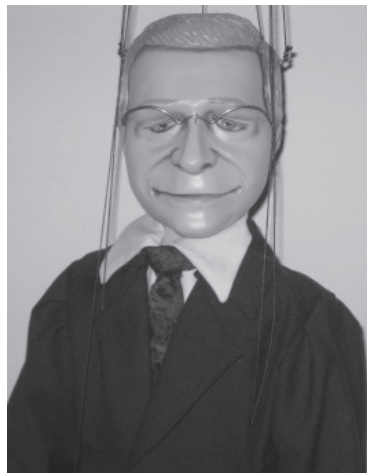
The first day at university I was fascinated by the inspiring voice in Jesse's speech and even happier to know that Jesse is a teacher of literature and poetry. I used to be a student in class specializing in literature in elementary and secondary. So when attending Jesse's seminar class, always welcome students with a friendly smile, with an emotional voice when teaching. Jesse really inspired me and once again inspired the love for literature and poetry that I thought I had forgotten. Jesse for me not only as a teacher but also as a father that I can share and receive useful advice from Jesse's life experience and profound knowledge. If you have a love of literature like me, Jesse will be a great choice.



卒業研究

4年 DAO HAI THANH

Four years in Meikai, I have to say Jesse's classes are something I had always looking forward to. I especially like his English and Culture class, where he talks about the American history but from his perspectives. His classes are fun and really enjoyable, but be careful, his enthusiasm when he talks about the subjects he likes might spread like a disease. If you got effects by it you might become more and more diligent so in case you want to be a better student, sign yourself up. After 2 years study with Jesse, my English has improved a lot. I barely could write and speak anything in English, but now, the words just come up to my mind naturally. There are also times, when I worried if the grammar and words I used are correct, however Jesse are always there to check and fix it for me. If you have read this far, I can tell that you are good in English or you have a strong desire to improve your English. So you should get to know Jesse, he is one of the greatest teachers that I would like to recommend for you. Enjoy your university life!



ジェシー先生のクラスでは英米文学の詩や、音楽を中心に、授業を行っていました。

知識を増やすだけでなく、自分たちも実際に詩を書いたり、翻訳をしていました。

このように貴重な体験をする事がジェシー先生のクラスの魅力です。

英語の文化に興味のある方は是非参加してみてください。

小谷哲男ゼミ

専門領域研究講座

このゼミでは、広く国際関係を学びながら、特にアメリカ研究に力を入れています。前期には、国際情勢の入門書を読み、貧困、移民・難民、食糧、エネルギー、関税、自由貿易、領土、核兵器など国際関係を理解するために必要な基本知識を身につけました。また、レポートの書き方を基本から学び、レポートと作文の違い、資料の集め方と使い方、注の付け方や参考文献リストの作成方法を学びました。さらに、プレゼンの基本についても学び、調査内容や自分の考えを他人に伝える効果的な方法を練習しました。

後期には、ゼミ生が関心のあるテーマとして、米中関係を取り上げました。米中は貿易戦争を行っていますが、そもそも貿易戦争とは何なのか、米中はなぜ貿易戦争を行うことになったのか、貿易戦争が本当の戦争につながることはあるか、という視点で主に英語の文献を読みました。ゼミ生はこのテーマについてのレポートをとりまとめることによって、米中貿易戦争が日本経済だけでなく世界経済に大きな影響を与え始めていることを知り、就職や進路を考えるための参考にもしています。

授業外では、ゼミ前にランチをしたり、アメリカ大使館の独立記念日やシンガポール大使館のナショナルデーレセプションに行ったりしました。また、研修で大手の貿易会社を訪問し、今日の通商の実情を学びました。コロンビア大学で研究されている元TBSアナウンサーで久保田智子さんの研究会に参加し、研究成果の発表会では久保田さんのプロのプレゼンを間近で体験することもできました。



小林裕子ゼミ

専門領域研究講座

3年 前山 一弥

今日の世界情勢に興味のある方や世の中の事柄に不満や疑問を持つ方、就職活動など将来に向けて真剣に考えている方は小林ゼミの受講をお勧めします。

授業は毎回「何か面白い話ある？」という小林先生の一言から始まります。ここで先生やゼミ生が持っている世の中への不満やニュース番組などで見たものについて話し合います。この話し合いが90分ずっと続く日もときどきあります。授業内容は先生がプリントしてくださった英字新聞を読み、考えの理解を深めていきます。内容は難しいものもありますが、先生がヒントをくださいますのでご安心ください。しかし、一般的な知識や英単語が分からなかった時には先生からの愛のムチが飛んでくることがありますので少しずつでも「勉強をする」という習慣をつけておきましょう。また、ニュースや新聞などでどのようなことが世界で起きているか目を通し、自分なりの考えや意見を持つようにしておきましょう。

もしかすると、小林先生がとても厳しい先生だと感じている生徒もいるかもしれません。確かに先生はとても厳しいですが、それは私たちと真剣に向き合ってくれているからです。私は早期に企業の選考が始まり、先生とよく相談をしました。その度に先生は親身になって話を聞いてくださり、多くのアドバイスをくださいました。このように生徒のことを考え行動してくださるので、私たちは先生のことを信頼しています。

小林ゼミは最も人間として成長できるゼミです。就職活動が始まる今こそ、多くの気づきや発見があるこのゼミを受講するのはいかがでしょうか？ よろしくお祈りします。



「最近、気になったニュースや出来事は何ですか」
と聞かれて、皆さんはどのようなことを思い浮かべますか？どんな意見をお持ちですか？
このようなことを日常的に考え、世の中で起こっていることについて理解を深めていくのが小林ゼミです。



授業は「何か面白い話ある？」という小林先生の一言から始まります。先生やゼミ生がみんなで共有すべきだと思った話題を共有したり、先生が日頃の不満やテレビで見て面白かった話をしたりします。話がたくさんあると90分通して話すこともあります。勉強の内容は、基本的に先生がプリントしてくださった英字新聞の内容についてみんなで考えを深めていくものです。3年次に引き続き、あらゆるジャンルの英字新聞を扱います。内容が難しいこともありますが、先生がヒントをくださり自ら理解できるように手助けをしてくださるので安心です。しかし、基本的な単語や一般常識は身に付けておく必要があります。最低限のことが分からない場合は、いつも優しい先生から危ないオーラが出てきてまれに鬼に変身したり、分からなかった単語をあだ名にされたりすることがあります。数か月間はそのあだ名で呼ばれるようになりますのでご注意ください！

4年生になると、卒業要件として卒業研究の提出が課されます。大学での授業や様々な経験を通して興味関心のあるテーマを見出し、それについて調べ、今後の展望や自身の意見などを述べます。テーマを何にするか、どの情報を活用するかなど悩みながらですが、ゼミ生全員がそれぞれの価値観や関心事を反映した卒業研究を作成しています。

日頃からテレビのニュースや新聞、BBC アプリなどで、社会でどんなことが起きているのか知っておくことが大事です。また、そのことについてただ受け入れるのではなく、問題意識を持ちながら自分の意見や考えを持つことも大切だと思います。

また授業以外にも、進路に関する悩みや個人的な相談にもものってくださいるのが小林先生です。就活のアドバイスをしたり、就職先が決まった時には自分のことのように喜んでくださいます。常に学生たちに寄り添い、愛のある接し方をしてく下さるので、私たちも心から信頼しています。最後に、インターネット環境が充実し、検索すれば一瞬で情報を得られる今、どのようなことに関心を持ち追及していくのか、自分はどう考えるのか。小林ゼミは、自分の頭で深く考えることの大切さを一番に実感できる授業だと思います。



嶋田珠巳ゼミ



※ 専門領域講座と卒業研究を合わせて掲載いたします。

3年 田中 純菜

嶋田ゼミでは、主に言語学、英語学、社会言語学など言語に関することを中心に勉強していきます。前期は、一人一冊自分の好きな本を選び内容や考えたことを発表しました。私は本を読むということを普段あまりしませんでした。しかし、ゼミのみんなの発表を聞いて「こんな本もあるんだ」「こういう考え方好きだな」と発見することができました。後期は、さらに卒論に向けて深く勉強し、興味のある分野ごとに本を選び内容、考えたことをまとめて発表しました。私は、方言に興味があるので同じように方言に興味があるゼミ生とグループを組みました。方言以外には、時の表現、ことばと文字、ことばのバリエーション、言語獲得というテーマで発表をしていました。

私のグループは、意見を合わせる時間がなかなか作れない中で、家に帰り長電話をしてレポートを作成しました。方言といっても考えることや見ていることは異なり、自分も勉強になり良い刺激になりました。私の出身は長野県の松本市という所であまり目立った方言はありませんが、語尾やイントネーションで違いが見られます。例えば、疑問で物事を聞くときには語尾に「～ずら」と付いたり、「半そで」のイントネーションが違ったりといった例です。その中でも、長野県は北部・中部・南部と分かれているため私も聞いたことのない方言があることを知りました。中部にしかない特徴などもあるなど、調べれば調べるほど情報は多いので私もまだまだ勉強中です。

夏の合宿では、四年生のゼミ生も参加し大人数で開かれました。四年生の就活や卒論についての活動が発表されました。その時、四年生の先輩の話で印象に残っていることは、就活の話です。面接の時には「もごもごしないこと。」「ヒールは今から履いて慣れておいた方がいいよ。」など経験した先輩にし

か分からない話が聞けたことが印象残っています。まだゼミは始まったばかりだけど、私も就活や卒論、しっかりと動かなければならないなと思いました。夜は、バーベキューやカラオケ、花火など、人がたくさんいるので、とても賑やかで楽しかったです。

1月に開催された議論型研究会は、四年生の先輩方の発表や英米語学科と日本語学科の先生方の発表などとても内容の濃い研究会でした。私か印象に残った発表は、近年使われている「～み」(やばみ、うれしみ)といった言葉を研究して卒論を書いた先輩の発表です。確かによく聞くことはあっても、どう使われているのか、どのような意味なのかというのは知りませんでした。日常にある言葉を不思議だと思い、研究したことがすごいなと感じ印象に残っています。普段見ることができない先生方同士の議論や先輩方の卒論の発表は、聞いていて難しい部分もありましたが、勉強になりました。

1年を通して嶋田先生とゼミのみんなと、毎週同じ時間に同じ場所でいろいろなことを学びました。分からないことがあったら真剣に先生に質問して話を聞いて、時には、誰かか面白いことを言ったらみんなて笑えるような環境でした。学びたいことはそれぞれ違うかもしれませんが、そのような環境でみんなと学ぶことができ私はたくさん良い刺激を受けました。四年生では卒論を書くので、三年生で学んだレポートの書き方や調べ方などを活かすことができればいいなと思います。言語のことを学びながら、自分の個性を活かしたい、いろんなことを知りたいという方は嶋田ゼミがおすすすめです。

4年 赤堀 開人

私は嶋田ゼミで学んだ2年間の中で物事を論理的に捉え、論じる能力を獲得しました。ゼミ内ではメンバーと教授で意見を出し合い1つのテーマについて深く考察していく機会が多く恵まれています。自分の死角からの意見を聞くことができ、物事を多角的に見る事ができます。これは普段の生活や授業では中々体験する事が出来ず、自分の知識の幅を増やす絶好のチャンスだと思います。嶋田ゼミは英米語学科のゼミではありますが、取り扱うジャンルは幅広く大変になるゼミです。ここで培った知識や能力は、授業内だけでは無く就職活動にも役立ちます。嶋田先生のお人柄も大変良く、親しみやすい方のため些細な事でも相談に乗っていただけます。外国語の知識だけで無く人間力も高めることが出来る嶋田ゼミは、自分をもっと成長させたい方に大変お勧めです。

4年 若月 啓貴

私は嶋田先生のゼミに4年生から参加させて頂きました。途中からの参加にも関わらず先生もゼミ生も快く受け入れてくれて、ゼミ合宿、議論型研究会などのイベントにも参加でき、とても楽しく充実した1年間を過ごすことが出来ました。卒業論文で苦労することもありましたが、先生やゼミ生との意見交換もあって最後までやりきることが出来ました。最初のうちは卒業論文のテーマも決まらず困っていましたが、嶋田ゼミに入る際に「自分の好きなことについて研究しなよ」と先生に言って頂き、やりたい研究を見つけることが出来ました。自分のやりたい研究、好きなこと、気になることを先生に相談したら、先生も応援してくれて、本や資料などを探し貸してくれたりアイデアやアドバイスなどをたくさんして頂きました。また嶋田先生は自分が卒業論文に行き詰った時、お忙しい中、時間を割いて直接面談をしてくれてアドバイスや意見をたくさんくれました。ゼミの雰囲気も、ゼミ生の1人が発案した

プロジェクトを先生やゼミ生のみinnで手伝ったり、意見を交換したり、ゼミ合宿や議論型研究会でもゼミ生が率先して準備をしたりして、明るく協力的で笑顔の多いとても雰囲気の良いゼミだなと思いました。また嶋田ゼミでは多くのことを学ぶことが出来ました。授業を通じてゼミ生の発表を聞き、自分とは違う考え方や言語の問題など知らなかったことをたくさん学ぶことが出来、また議論型研究会では教授などの普段聞けない方たちの発表を聞くことが出来とても為になりました。私は1年間嶋田ゼミに所属し楽しく、時には自分の努力が足らず苦戦したりもしましたが充実した1年を過ごせて心から良かったと思っています。

4年 村田 涼

私は卒業論文を作成するにあたり、調査研究を行いました。卒業論文は「日本語学習外国人留学生の発話分析」についてです。アルバイトで外国人と働く機会が多く、その中で感じた事が多くあったので、日本滞在する外国人に関する卒業論文を作成しようと考えていました。日本に来て間もない、異なる母語を持つ、外国人留学生2グループと日本語母語話者で、お題に沿って会話をしてもらい、撮影した動画をもとに、発話スクリプトから見えた日本語の違いについて卒業論文を作成しました。外国人留学生をゼミ院生の協力で集めていただき、調査研究を行ったこと、録画した計4項目のセッションで、協力者1人、1人の発話した言葉を文字に起こす作業など、今までにないくらい大変で有意義な経験をしたなど感じています。卒業論文を作成する前に、多言語の背景だったり、日本語の特徴だったり、もっと興味や関心の部分を広げておくべきだったなど感じています。

2年間、嶋田ゼミを過ごして感じたのは、ゼミ生全員の「言語に関する興味」を共有していき、自らの言語に関する興味の量も同時に増やしてくれるゼミだったということです。また、自分の興味や関心を最大限に成長できるゼミとも言えます。嶋田先生は、努力に答えてくれる先生です！一生懸命学習する生徒には、忙しい時間の間でも協力してくれます。私個人としては、このゼミだからこそできる経験をさせて頂き成長した部分があるので、嶋田ゼミを選んで本当に良かったと思っています。

4年 伊藤 有希菜

私は嶋田ゼミに入ってから本を少しずつ読むようになりました。自分の興味を見つけてその興味からフォーナートークの卒論を書きました。自分たちでいちから動画を撮るところから研究をしました。その分とても大変なことが多かったのですができた時の達成感はとても大きかったです。なによりも自分にしかできないオリジナルの研究になったこと、協力してくれた人たちにとても感謝していると同時に、自分はこの研究に携われてとても嬉しく思います。ゼミでは自分のやりたいと思ったことをやりきる力を身に付けることができ、周りのゼミ生との協調性を学びました。特に嶋田ゼミの人たちは個性豊かでとても面白い人達ばかりで毎回ゼミの時間が楽しみでした。嶋田ゼミでは毎年夏に合宿に行きます。そこで普段は知らない友達や先輩、後輩とも話す機会があり一緒に生活して1日だけとても仲良くなれ、集団生活における協調性にも繋がります。私は社会人に向けて自分がやりたい仕事を諦めずに続けていくこと、協調性を持つことというゼミで学ばせて頂いたことを生かして自分の糧にしていけるように努力していきたいです。

4年 崎代 里紗

私は嶋田ゼミに入って良かったと心から思います。先生の専門である社会言語学、言語について興味を持っている人は、是非嶋田ゼミに入るべきです。3年時のゼミでは、先生が用いた言語学的な文献をみんなで議論し合う事があったのですが、私は最初内容が難しすぎて、正直全然ついていけないと感じる事が多々ありました。ですが毎回先生が色々なことをアドバイスしてくださるので、毎週行なっていくうちにコツを掴み、少しずつ理解していくことが出来ました。プレゼンテーションを行う際も、嶋田先生はレジュメの作り方から発表の仕方まで事細かく指導してくださるので、私の成長に大きく繋がりました。

卒業論文は、消滅危機言語であるハワイ語の復興運動について書きました。このテーマは自分で設定したものの難しく、1番大変だったことは、文献をたくさん集めてひたすら読み漁っていくことです。人生で、なにか1つのテーマについてこんなに調べることはないのではないかなと思うくらい調べまわりました。ですが、これは卒業論文を書き終えた時の達成感に繋がります。1つ私の失敗から言えるアドバイスは、出来るときに出来るだけやるという事です。私は計画性がなく、卒業論文の文献を集める始めの段階から後回しにする事があり、あとあと大変になって後悔しました。卒業論文を書き始めて取り組んでみると、探究心が意外にも出てくるもので、もっと時間がほしいと思ってしまうます。せっかくの卒業論文を、調べ不足で終わらせてしまうのは勿体無いので、早いうちから十分に調べ、書くことよりも準備に時間をかけることをおすすめします。卒業論文は全力で取り組みば取り組んだ分だけ達成感が大きいです。ゼミに入ってから論文提出までが1つのゴールだと思い、毎回のゼミではたくさんのことを先生から吸収してほしいと思います。

また、このゼミはそんな素敵な先生のみではなくメンバーも最高でした。このゼミは勉強をたくさんするだけではなく、夏には1番の楽しみである勝浦のコテージでのゼミ合宿があります。ゼミ合宿ではプレゼンテーションや議論をした後、バーベキューや花火などをしてみんなで遊びます。この夏合宿をきっかけに一気にみんなが仲良くなります。嶋田ゼミは、勉強を頑張るだけではなく、遊ぶことにも全力なのですぐに仲良くなれるゼミだと思います。このゼミから学んだことはたくさんありました。発表した後など、議論することが多かった為、みんなからの意見を聴け、先生からアドバイスをもらえることで考え方の幅が広がります。人の意見を聴き、こんな考え方もあるのかと感ずることはとても大切なことだと思います。また、人に意見することは相手の為でもあります。このゼミで学ぶことは、今後社会人になってからも必要なことばかりです。

そして、勉強の面だけでなくゼミメンバーとの思い出を作ることも大切にしてもらいたいと思います。きつと、卒業しても仲良くしたいと思える仲間たちになっていると思います。そして嶋田先生は、人柄をみてわかると思いますすが本当に良い先生です。ゼミに迷っている人は、是非嶋田ゼミに入ってみてください。絶対に入って良かったと感じると思います。ちなみに私は、このゼミに入ってから勉強面でも、人としても大きく成長出来たと思っています。嶋田先生と嶋田ゼミのみんなに感謝の気持ちでいっぱいです。本当に嶋田ゼミで良かったと思っていますので、心からおすすめします！

高田智子ゼミ

専門領域研究講座



Professor Takada's Course for the Field of Specialization

3年 Park Hyun Joon

Why I chose Professor Takada's course

I am an international student who is studying Japanese as a foreign language. I want to speak Japanese as fluently as a native speaker of Japanese. Of course, I know well that it is very difficult, but I am determined to succeed in acquiring native-like Japanese proficiency. That's why I got interested in knowing how I can be a successful learner of foreign languages. I want to know how I can reach a high level of Japanese proficiency, and what are some of the common characteristics of successful language learners.

As a sophomore, I took a course which is geared to English language majors taught by Professor Takada. Its objectives were to be able to read books on the English language and culture, as well as to get familiarized with the mode of thinking required to English majors. In this class, I learned the basic knowledge about second language acquisition. It included many interesting issues: what differences exist between first and second language acquisition, what factors affect language learning, how we can be successful language learners, and what approaches have been developed to learn foreign languages. The textbook we read in the course, an introduction to second language acquisition written by Yasuhiro Shirai, was difficult, but I gained basic knowledge about how language is learned.

I became more interested in this field and decided to explore language acquisition issues more deeply. I chose Professor Takada's special research course in my junior year. I never regret my decision. In fact, I think that my choice was the best.

What I learned in this course

In Professor Takada's seminar, I gained detailed knowledge about first and second language learning and acquisition through reading Lightbown and Spada's *How Languages Are Learned*. Reading an English book from cover to cover was a challenge, but it gave me a great sense of accomplishment.

I was very surprised at the fact that so many researchers have devoted themselves to the research to find how language is learned. They conduct experiments in various learning contexts, in which learners from different linguistic, cultural, social, and educational backgrounds learn language. Their research findings are not straightforward. In fact, some of them are contradictory. I learned that language learning is a very complex process.

Toward the end of the book, the authors present six learning methods. The one that appealed to me is to take part in conversational interaction and negotiation of meaning. Second language learners cannot acquire language proficiency unless they test and modify their hypotheses through interaction in the target language. If I apply this method to my foreign language learning, I will have to expose myself to abundant comprehensible input and to take every opportunity to interact with others.

What I decided to do to be a better language learner

After taking Professor Takada's course, I want to utilize my knowledge to be a better language learner myself. First, I will have more interaction with Japanese people to improve my Japanese. When communication breakdown occurs, I will turn to communication strategies such as asking for clarification and paraphrasing what I want to say. Second, I will analyze the errors I make. If I get any corrective feedback from Japanese native speakers, I will take it seriously. Third, I will keep diary in Japanese. Once I write about daily events together with my feelings and thoughts, I can recycle the expressions I used in the diary when I speak. Thus, I think I will feel more confident when I speak.

I came up with these ideas thanks to what I learned through the course on second language acquisition. This course helped me to be a learner who can decide how to learn languages for myself.

高野敬三ゼミ

専門領域研究講座



3年 有賀 瀬菜

高野先生ゼミのテーマは「これまでの教育とこれからの教育を考える」です。ゼミでやる内容は日本にどのように英語教育が始まり、昭和22年から現代までの学習指導要領を読んで学びます。自分たちの受けてきた教育とどう違うのか、これからどのように教育が進むべきなのかを先生も含めゼミ生で話し合います。基本的に先生の講義ではありません。自分たちが読んでまとめてきたものをみんなで発表します。同じもの読んでもまとめ方はみんなそれぞれ違うのでそこを見つけれられるのもこのゼミの面白いところです。

重要な点は先生が補足してくれます。一年間ゼミを通して文章を読んで要点をまとめる力がつきました。内容は少し難しいところもありますが、先生がとても優しく和気あいあいとしたアットホームな楽しいゼミです。

3年 池田 義友

大学生のうちに身につけるべきものの一つとしてクリティカルシンキング (critical thinking) があります。これは物事をただ批判するのではなく、「本当にそうかな？」という思考力です。学問に関わらず、普段私たちは人やテレビなどから情報を得ます。しかし、それを疑わずに鵜呑みにしていませんか？高野ゼミでは、昭和22年から現行の学習指導要領を題材にし、ゼミ生それぞれの視点でプレゼンテーションを行います。時には先生からのご教示があります。また、プレゼンテーションを行うことから発表の仕方

も学ぶことが出来ます。この時間を通して、学問の基礎・社会に出る基礎である「物事を多角的に見る力」を養っていきましょう。高野ゼミで待ってます！！

3年 狩谷 亜実

高野ゼミでは主に昭和からの学習指導要領を使って、英語教育がどのように変化してきたのかを学びます。ゼミ生一人一人が同じ資料に目を通してプレゼンをしても、内容が被らず、自分が気付かなかった所や違う目線からの意見を共有できるのでとても楽しく、先生からも友達からもたくさん学ぶ事ができるゼミだと思います。また、毎時間発表がある事でパワーポイントの作り方、人前でプレゼンをする力も同時に身につきます。そして一番大事なのが、高野先生。生徒をいつも一番考えてくださる、とても素敵な先生です。私がゼミに入ったのは、内容よりか高野先生の所で学びたかったという理由も大きいです。

資料の読み取り能力が付き、プレゼン能力も付にき、素敵な先生もいるまさに“ハッピーセット”ゼミです。

3年 初見 侑

私たちのゼミは、はっきり言って教職を履修している人にお勧めのゼミです。しかし、プレゼンテーション能力を付けたい人は、このゼミでは、毎授業プレゼンテーションをするので力が上がると思います。生徒自身がプレゼンテーションをするので授業は楽しく、周りのプレゼンテーションも見ることによって他の生徒のいい部分を自分に生かし、プレゼンテーションの力がぐんぐん上がっていきます。しかし、なぜ教職を履修している生徒にお勧めのゼミかという、このゼミでは1年かけて学習指導要領について触れていくからです。このゼミでは学習の歴史について身につけながらも、人前に立って話すということに慣れるということが出来るゼミです。

3年 渡辺 幹太・次期ゼミ長

このゼミでは昭和の学習指導要領から新学習指導要領までをゼミ生の5人で紐解いていきます。5人の様々な個性豊かな観点から考察した学習指導要領について発表し、その学習指導要領ではどのような力が子供たちに求められているのかを議論していきます。そして今後の英語教育についても考えていくゼミです。また、今の日本の教育業界で起きている問題やこれから起きていく改革についても考えていくことのできるゼミになっています。これから教員に求められている能力などが分かり、その能力を確実につけていけることのできるゼミだと思っています。教職関係に興味のある学生にはもってこいのゼミになっています。

卒業研究



4年 佐々木 健

高野ゼミはこれからの「教育」を考える学びの場です。

3年次では、学校教育の根幹を成す、学習指導要領を昭和の「試案」から振り返りながら、それを叩き台として戦後から今日までの教育にフォーカスを当て、学習を深めています。

4年次では、学んだことを発展させ「今後の日本の英語教育がどうなるか」それぞれのテーマに沿って研究を行います。将来教職の道を目指す仲間がここには集まっています。ぜひ、お越しください。

4年 荒井 克也

高野ゼミでは英語教育を深く学びます。最終的には論文作成を行います。論文作成にあたり、高野先生が個別で指導してくださるので、とてもまとめやすいです。自分は教職課程を履修していませんでしたが、英語教育に興味を持ちこのゼミに入りました。英語教育がどのように行われてきたのかをこのゼミで学ぶことが出来るので、教職課程を履修している人や履修していない人でも、英語教育に興味がある学生は是非履修してみてください。

4年 富塚 虎太

高野ゼミは戦後から現在までの英語教育を振り返りこれからの英語教育について考えていくことを目標に活動しています。講義内では教員が指導する際の基準となっている学習指導要領というものを各年を予め読みまとめ、議論を交わし過去の英語教育を深めています。近年、新学習指導要領が出されて、小学校の英語が教科になったり、中学の英語の授業ではオールイングリッシュ、また、大学受験では外部試験の取り入れ等日本の英語教育が熱いです。その英語教育を熱く優しく教えてくださる高野先生や仲間と共に過ごし、高野ゼミが私の大学生活をより充実させてくれました。

4年 内山 葉月・ゼミ長

高野ゼミでは、今までの学習指導要領を振り返りこれからの英語教育の方向性について考える授業をしています。この学習指導要領を振り返ることで、教員として現場に出る時にどのような指導を行うべきか考えることができます。また、学習指導要領を初めから振り返ることができるので教職課程を取っていないなくても楽しく学ぶことができます。もし、教職課程は取りたくないけど、教育について学んでみたいと思ったそのあなたは、このゼミに入るべきだと思います。

4年 脇山 清美

高野ゼミでの2年間、私は日本における英語教育の変遷と自身の研究課題である小学校英語教育について学びました。日本の英語教育の変遷を学ぶことにより、今までの英語教育の課題を見つけることができ、その課題をどのように解決してきたのか、又これからの英語教育をどのように改革していけば世界に通用する子どもたちを育てていけるのか等、自分の興味のある分野を深めていくことができます。英語教育の歴史に関心のある学生にはとても興味深い内容になっていると思います。

瀧田健介ゼミ

専門領域研究講座

3年 尾関 拓巳

僕が瀧田先生のゼミで学んだことは、「自分で考えることの大切さ」です。正直僕は小さいころから文を書くことが嫌いなため、ゼミ論はとても嫌でした。テーマはもちろん言語に関わることでしたが、「強調語」を僕はテーマにしました。その後面談の際に、先生からテーマをより限定したほうがよい、などのアドバイスを頂き、歌詞の中の強調表現について書くことになりました。実際に歌詞を見てみると、強調表現がまったく使われていないことに気づき、先生にテーマを変更したいと申し出ましたが、もっと調べて考えてみな、といわれ、しぶしぶテーマを変えなかったのを覚えています。(笑) そこでようやく調査を始め、いろいろな知識を蓄えました。そしてその論文に自分のアイデアを入れました。書いている時は、こんなこと書きちゃっていいのかな、と思っていましたが、先生は褒めてくれました。ちゃんと自分で考えたことを褒められ、初めて勉強というか、学校でやっていることで面白いと感じました。このゼミで学んだ自分で考えるというのはとても大切なことだと、いま就活をしている上でも実感しています。瀧田先生のゼミでは、「自分で考えることの大切さ」を学べます。そして、ただネットや本を写すだけではなく、少しでも自分で考えたこと、こうしてみようかな。など、瀧田先生はしっかり見てくれます。



3年 伊井 将人

教科書を通して英語を様々な分野から学ぶことが出来ます。その中でも印象に思ったのは形態論という分野です。英語の単語の構成はどのようになっているのかを詳しく学ぶことが出来ました。今後は日本語の単語の構成はどのようになっているのかを英語と比較しながら学ぼうと思い非常に興味を持てる授業でした。

3年 大坪 知生

僕の所属するゼミでは英語言語学について学びました。統語論や意味論や英語史など、英語をより正しく扱うための授業だけではなく、英語とはそもそもなんなのか、どこから伝わりどのように変化していったかなど、英語という言語の根本的な部分について知ることができとても良い経験になりました。

3年 坂本 風花



ゼミでは、言語についての「なぜそうなるのか」を英語の教科書で学びました。日本語でも理解するのが一苦勞な言語学ですが、それを更に英語で学ぶことが本当に大変でした。でも、分からないところは分からないと気軽に発言できる空気がクラスにありました。ゼミ合宿

では勝浦のコテージに行きました。そこでそれぞれの論文テーマを発表し、友達の様々な研究テーマにとっても興味がわきました。友達とも先生とも様々な話ができて仲が深まり、本当に楽しかったです。

3年 大澤 亜美

日本語を母語としている自分にとって、日本語では考えずとも自然な流れで言葉を理解し使うことができます。ですが英語となると単語や文法、全てを頭で考え組み立てる作業が必要です。専門領域研究講座では、それらについて学びました。

3年 代 雨檜



専門領域研究講座では言語学という単語の意味からして難しいものを研究していて、今まで学校で英語を学んだ時には思わなかった言語についての問題や、仕組みを理解できずただ先生に言われたやり方で覚えてだけの文の構造を自分で考え、仮説を立て、証明する、の繰り返しで謎を解くことができました。文の複雑な仕組みをいろんな角度から見て少しずつ理解し、なぜ人

間は言語ができるのか、なぜ赤ちゃんは周りの人の言葉を聴いて覚えるようになるのか、母語以外の言語についてどういう仕組みなのか、など常に疑問を持つようになりました。また今まで当たり前のように使っている言語（単語や文）についてさらに深く学びたいと思えるようになりました。

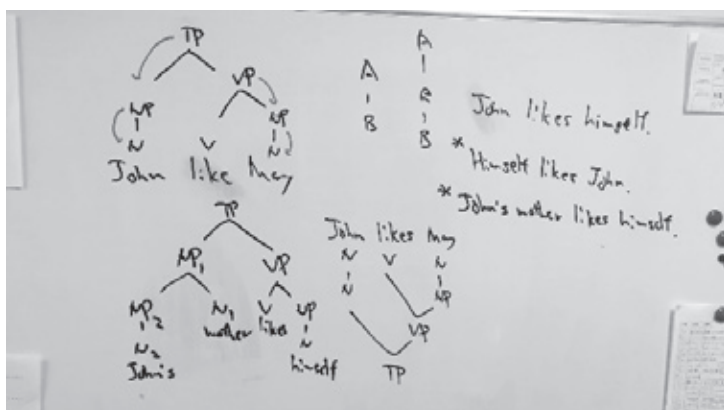
3年 吉武 和晃

このゼミでは主にことばについて学ぶことができましたが、授業を通してことば以外にも、疑問を持つことで新たな発見ができ、謎を見つけられることが分かりました。またゼミ合宿もいい思い出になりました。ゼミ論文を書く機会もありとても良い経験になりました。

卒業研究

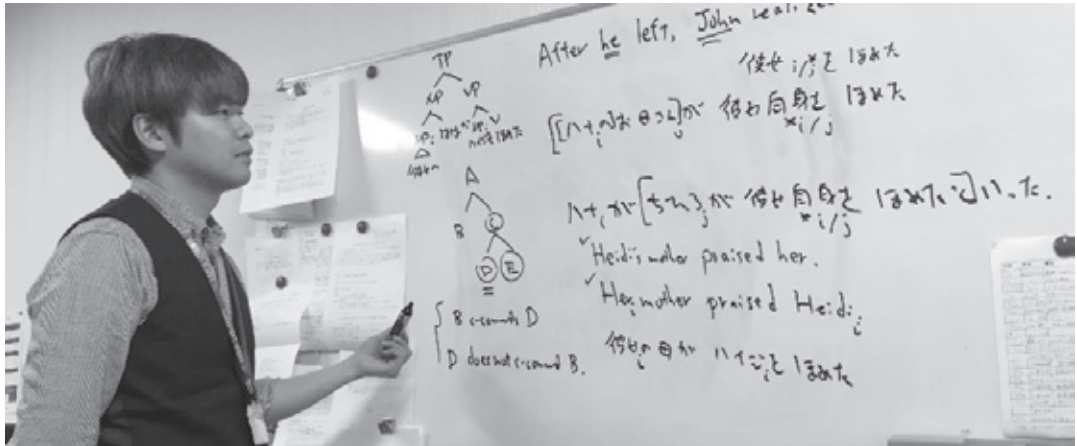
4年 井上 裕貴

卒業研究では英単語の多義性について研究しました。このテーマにした理由は、今まで英語を学んできてよく目にする多義語について純粋に疑問に思ったからです。テーマは決まったもののなかなかうまく進めていくことが出来ませんでした。先生の手厚いサポートのおかげでなんとか提出することが出来ました。卒業研究で大切なことは、テーマについて自分の考えたことを論理的に発信していくことだと学びました。テーマについて文献を頼りに進めていくと、既に論じられていることが多く自分で考えたオリジナルの考え、意見というものに辿りつくことは難しかったのですが、なぜそう考えたのかということは自分なりに論理的に伝えることが出来たと思います。そしてこれは社会に出たら特に求められることだと思います。瀧田ゼミでは授業で常に問われます。卒業研究で大事なことは日ごろの授業から訓練していたのだと実際の執筆を通じて感じました。このゼミに入って間違いではなかったと思います。そして大事なことを学べ、成長していけるゼミだと思います。



4年 田口 直也

統語論を通して今まで学校で放置された英文法のなぜを追求する。単純なことなのに知るだけで英語への理解がより深くなる。これまでは「こういう文法だから覚えて」と言われていた内容。そのなぞを知る楽しさを一緒に学びませんか？このゼミでは英語をベースにすべての言語が持つ一定の規則性を見つけていき、その法則が正しいのかどうかを科学的に一つ一つ検証していきます。これまで学校で学んできた文法がなぜ正しいのか。どういう理屈で正しいとされてきているのか、学校で受けただけでは理解できなかった内容もゼミをしていく中で自然と理解できるようになります。これまで以上に深まる英語という言葉。それだけでも十分に受ける価値のあるゼミですが、さらにこのゼミで学んできたものをさらに昇華させていくと、他言語の学習時にも応用することができます。明海大学に入り、もっと英語だけではなくほかの言語も学びたいという気持ちが強くなった人も多いと思います。そういった気持ちを持った時にこのゼミで学べる内容を活かすとこれまで以上に学習効果を高めることができるでしょう。



4年 甲斐 達大

私はこのゼミで統語論について学びました。統語論は言語学の1つです。統語論では、人間の頭の中にあると考えられる普遍的な文法を解き明かそうとすることが目的です。何故このようなことが考えられたかと言うと、ほとんどの子供はあまりにも早い速度で正確に周りの人間たちの話す言語に適応し、それを第一言語として獲得出来ることが疑問に考えられたからです。具体的な研究方法としては、統語論の基本を学び、樹形図と言われる図などを使って文の構造について考えたりします。また、非文法的と言われる文を単に非文法的とするのではなく、何故非文法的なのかを統語論の考えを用いて考えます。このゼミでは、英語以外のほかの言語も出てきますが、英語が研究のメインとして扱われます。私は統語論について学び、今まで考えていた文法に対する視野が広がりました。今までは非文法的なものはルールに合っていないからとしか考えませんでした。改めて何故なのかと疑問を持つことは結構面白いことだと思いました。言われていることや書かれていることを鵜呑みにするのではなく、疑問を持ち考えることは大事なことでこのゼミで学ぶことができました。

内藤貴子ゼミ

専門領域研究講座



3年 浅野 晴花・佐々木 房之介

私たち内藤ゼミは、イギリスを中心とした英語圏の児童文学の研究を通して、文学研究法や、作品の背景にある歴史や文化を学んでいます。英語で物語を継続的に読む「原書マラソン」を行い、さらにグループディスカッションを通じて議論する力をつけ、論理的思考力を養う練習をしています。

前期では「探偵小説と警察小説という表象」や「グリム童話はなぜ愛され、語り継がれるのか」というテーマに分かれてグループ研究をし、読解や分析はもちろん、歴史的背景、文化、表象を、作品や文献から紐解いていきました。グリム童話とペロー童話の関わりを探ったり、ディズニー作品を原作のフェアリーテイルと比較したりして、グリム童話が今も愛される理由をグループの仲間と議論し、学びを深めることができました。後期の個人研究で、各自作品とテーマを決めて深く掘り下げたことは、4年生で行う卒業研究の練習にもなりました。「メアリー・ポピンズから見えるイギリス文化」と「メアリー・ポピンズはなぜロングセラーなのか」についての研究では、『メアリー・ポピンズ』という作品から見えるイギリス文化や、なぜこんなにも長く世界中の人々から愛されているのかについて研究しました。

この一年間を通して、研究することの難しさを実感しました。特に個人研究では「どの作品を読み、どんなテーマにするか」そして「研究の手法」について悩みました。しかし、作品を読み研究することでわかる文化や習慣、人間性、さらに筆者が作品に込めた





思いを理解することで、「研究する」ことの面白さ素晴らしさを実感することができました。また、ゼミではグループディスカッションを何度も行い、コミュニケーション力はもちろん、発信力や話す力と聞く力を養う練習ができています。その結果、議論する力や論理的思考力を養うトレーニングができ、就職活動の選考でも活かされています。

児童文学の代表作や一般にはまだ知られていない最新作を読む課題も、継続的にこなしてきました。例えば *The Wonderful Wizard of Oz* や *Skellig*、*The Giver* などの作品を読みました。その中でも *A Christmas Carol* では、当時のイギリスの階級社会構造から見えてくる主人公の人間性や心情の変化を関連させながら作品を味わうだけではなく、作品の背景にある歴史や文化、社会問題など様々な視点から読解や分析を行うことができました。



内藤先生はゼミ生一人ひとりを尊重し、いつも優しい眼差しで私たちを見守ってくださいます。先生はいつも笑顔で文学の魅力ある世界に私たちを引き込んでくださるので、楽しく過ごしています。改めて内藤ゼミで活動できてきて良かったと実感できています。

内藤ゼミの公式 Twitter (@naito_zemi) にて活動報告しているので、是非とも

チェックしてください☺



卒業研究

4年 戸室 菜々子

英米ジャーナルを読んでいるそこのあなたに、質問します。大学生活に“ときめき”を感じていますか？また、どんな時に心がときめきますか？もし、あなたが未知の“ときめき”を探し求めているのならば、内藤ゼミで“ときめき”を探すことをお勧めします。

内藤ゼミは、英語圏の児童文学を研究するゼミです。「児童文学にあまりなじみがない…」「読書って苦手…」という心配もあるでしょうが、ご安心ください。内藤ゼミのゼミ生は、初めからから全員が、児童文学に詳しいというわけでも、読書が得意というわけでもありません。内藤先生が児童文学の“じ”から“く”まで、丁寧に指導していただきますので、授業を受けるたびに、児童文学の奥深さにふれることができ、読書も好きになっていきます。少し、ホッとしましたか？それでは、なぜ内藤ゼミで“ときめき”を探すことをお勧めしたいかという、児童文学には沢山の“ときめき”がまつまっているからです。



例えば、ファンタジーなんてどうでしょう。ファンタジーといえば、魔法や異世界、奇奇怪怪な生き物が出てくるというイメージがありますが、そのなかでも魔法を想像する方が多いと思います。魔法を扱う作品では、J.K. ローリングの『ハリー・ポッター』や、ジブリの『ハウルの動く城』（原作はダイアナ・ウィーン・ジョーンズの『魔法使いハウルと火の悪魔』といます）が有名ですが、古典的なファンタジーってどういうものだろうと思ったことはありませんか？ネズビットの『砂の妖精』という作品は、古典的なファンタジー作品です。もし、読む機会がありましたら、作品が書かれた時代や、本に出てくる魔法を想像してみてください。きっと、ときめきます。また、ファンタジーには“タイムファンタジー”というジャンルもあります。フィリパ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』や、ジョーン・G・ロビンソンの『思い出のマーニー』、ルーシー・M・ボストンの『グリーン・ノウの

子どもたち』などがありますが、先ほど挙げたファンタジーのイメージとは少し違った、時間を介した不思議な世界が広がっています。作品の題名を聞くだけでも、わくわくしてきましたか？もっと、色々知りたい！と思った方は、ぜひ内藤ゼミの扉を叩いてみてはいかかでしょうか。内藤先生は、私達をときめく児童文学の世界へと導いて下さる、不思議な力をお持ちの先生ですので、自分が見つけたいときめきを一緒に探し出してくださいませ。これから、さらに詳しく内藤ゼミの世界をご案内します。



内藤ゼミでは、春休みから夏にかけて、卒業研究で扱う題材を決めるために、様々なジャンルの本を読みます。そうすることで、普段あまり本を読まない人も、作品の舞台となっている国や作者の出身地から、文化や風習、歴史的背景などを深く知ることができます。そして、このゼミの特徴でもあるディスカッションをすることで、作品についてどのような疑問を抱いているか話し合い、ゼミ生1人1人の捉え方や感じ方の違いを共有し、自分が研究する課題の切り口が多様であることを学んでいきます。内藤ゼミの良いところは、背伸びをせず、小さなことでも討論し、仲間の意見を大切にすることです。思うように研究が進まない時も、ディスカッションを通じて先生やゼミの仲間からの意見や感想をヒントに、次回までに何をすべきなのか発見できます。卒業研究というと、個人で進めていくように思いますが、内藤ゼミではお互いに研究する作品を読み合い、議論を重ね合い、ほかのゼミ生の手助けもしながら自分の研究を進めます。つまり、内藤ゼミの卒業研究は個人戦でありながら団体戦でもあり、みんなの協力も得て作り上げます。また、夏には勝浦で合宿をしました。内藤ゼミは、オンとオフがきっちりできるゼミなので、卒業研究の経過発表もしっかり行い、BBQや花火で親睦を深めました。そしてクイズ番組さながらに白熱した景品付きクイズ大会では、それぞれ卒業研究で扱う作品から問題を出題したため、お互いの作品を楽しみながら勉強することができ、まさに一石二鳥でした。1泊2日の合宿でしたが、とても有意義な時間を過ごせました。

“ときめき”を見つけない方、読書に挑戦してみたい方、児童文学の世界を知りたい方はぜひ内藤ゼミへ！

内藤ゼミでは、春休みから夏にかけて、卒業研究で扱う題材を決めるために、様々なジャンルの本を読みます。そうすることで、普段あまり本を読まない人も、作品の舞台となっている国や作者の出身地から、文化や風習、歴史的背景などを深く知ることができます。そして、この



ケイコ・ナカムラゼミ

専門領域専門講座

This year we tackled many challenging topics in the field of psycholinguistics, starting with animal communication (e.g., bees, monkeys, primates, dolphins, whales). Each student selected an animal to research and to examine whether their animal was able to communicate, and if so, how the animal communicated and whether they had “language.” In doing so, we tried to define the term “language,” which is a difficult task.

In the next section, we studied first language acquisition, by exploring the stages of child language development. We started with preverbal babies (who already have communicative skills), and moved on to toddlers and preschoolers, followed by elementary schoolchildren and teenagers. Language development is a lifelong process, but much of language development occurs in the first 7-8 years. During this section, we viewed videos of children learning many different languages, in different stages. For example, we searched for videos of parent-child interactions, to see whether parents used child-directed speech (parentese) to their children in different cultures. We also looked for examples of preverbal communication, such as cooing and babbling. At the end of the first semester, all of the students conducted presentations on a topic pertaining to first language acquisition.

One of the main events of this year’s zemi was our Summer Camp at the Meikai Katsuura Seminar House. Held jointly with the fourth-year students, we presented our project proposals, enjoying the beautiful facilities and some wonderful meals.

In the second semester, we covered second language acquisition and bilingualism. We reflected



on our own language learning experiences and discussed the pros and cons of different teaching methods and learning strategies. Some of the teaching methods we highlighted were grammar-translation method, audio-lingualism, total physical response, and communication-based teaching.

When covering the various topics, we always tried to view

Summer Camp at the Meikai Katsuura Seminar House

things from a psychological perspective, considering factors such as culture and context. At the end of the course, students conducted a presentation on a topic of their choice, pertaining to psychology and/or language.

Takaaki Kobayashi (3rd Year)

In Kei's seminar, we study psycholinguistics through research and her lectures. She gives us time to study freely so the atmosphere in the seminar is so friendly that we can ask her anything. Since she is from the U.S., the language we use in the seminar is English. For students who want to use English as much as possible at Meikai, this is a good choice for a seminar. As when you become a third-year student, you will have fewer opportunities to speak English because we do not have Integrated English classes in our third and fourth years at Meikai. This means you will have to keep using English regularly to improve your English skills on your own.

Also, in this seminar, we have many chances to give presentations in front of everyone. Presentation skills are very much in-demand in this modern society. Kei will teach you how to deliver your presentations. The more you practice presentations here, the more confident you will feel when giving a presentation in front of everyone. In preparing for your presentations, you will also have to write scripts for these presentations. That will make it easier for you to write essays and paragraphs in English. If you are someone who wants to improve your English skills and presentation skills, this seminar is suitable for you.



Zemi Christmas Dinner

卒業研究

This year's senior thesis/project class had 16 students. Some students continued with the topic they had selected for their *zemi* report during their junior year, while others selected new topics. Students were asked to find a topic related to language, communication and/or psychology. During the first semester, we studied different research methods (e.g., questionnaires, interviews, observations) and explored a wide variety of research areas and topics. Together we scrutinized research papers to become familiar with the organization, structure, and formatting of research papers and to learn about referencing. By the end of the first semester, most students had narrowed down their research topics and had submitted a research proposal with their research objectives, a short literature review, and their methodology.

During our summer break in August, we enjoyed a joint summer camp with the third-year *zemi* students at the Meikai Katsuura Seminar House. It was a wonderful three-day trip, with research proposal presentations and independent study sessions, in addition to two days of BBQ dinners and full American-style breakfasts.

By the start of the second semester, most students had successfully completed their job-hunting, and were ready to focus seriously on the writing of their senior reports. After expanding their literature reviews and fine-tuning their methodologies, students were ready to collect and analyze their data, and to write up their findings on their selected topics. I have certainly had a wonderful year with the seniors and wish them the best of luck in their new challenges!



Joint BBQ at the Katsuura Seminar House

What we did in Kei's seminar

Do you know how animals communicate with each other?

Do you know how babies learn language?

Do you know that bilingual people have brains with which they can switch between their languages quickly? We surveyed many interesting topics like these.

In the first semester of our third year, we compared many different animals as well as babies and children through videos and Kei explained a wide range of things related to animal communication, child language development, second language acquisition, and bilingualism. In the second semester, we had presentations about topics on which we were interested in through the seminar.

For example, I was interested in bilingual or trilingual people when I was in my third year. The reason for this is my friends and professors are mostly bilingual or trilingual. And when I was in my third and fourth year, I experienced a Japanese-English interpreting job. Then, I wondered about it

and became interested in bilingual or trilingual people like my friends and professors. How are they able to switch between two or three languages in their brains? So I decided to research how they can switch between their languages quickly. And when we were in our senior year, we had to find our own topic for our senior thesis or report. This sounds hard, but I think it was good for myself because I could gain a lot of knowledge about a question about which I wondered or didn't have knowledge. If you cannot speak,



listen, write, or read English, you don't need to worry about that. Because Kei is a multilingual person. She can speak many languages. (Her Japanese is totally better than my Japanese. I respect her!)

The atmosphere

I think Kei's seminar students are friendly people. No fighting, we always agree among ourselves. The seminar is a very peaceful seminar. No problem if you don't have a friend. You can make many friends in Kei's seminar! We discuss about what we want to talk about with Kei every time. She comes to each of our desks to work with us. (She doesn't just look at us all the time.) She is a very kind and fantastic professor. You should do an interview with her as rapidly as possible!

原 和也 ゼミ

専門領域研究講座

3年 春名 貴博

「〇〇さんってコミュ力あるよね」、「私ってコミュ症だから上手く会話できないんだよね」。このような会話は、日常でよく耳にする言葉です。社会において、コミュニケーション能力が重要視されるようになった時代。コミュニケーションをとる力は、大切な能力の一つと言えるでしょう。では、この『コミュニケーション』とはいったい何でしょうか。お互いに言葉を交わすことでしょうか。あるいは、誰かと一緒に何かをすることでしょうか。それらはコミュニケーション全体から見ると、ほんの一部にしか過ぎません。自分が「あ、今、私、コミュニケーションしてるな」と認識できるものもコミュニケーションです。しかし、もしかすると、今あなたが無意識に行った行動もコミュニケーションなのかもしれません。こう考えると、「コミュニケーションって何だろう？」と気になりませんか？私は気になったその一人です。その“気になる”コミュニケーションを、深く学び、理解することができるのが原先生のゼミです。



原先生のゼミでは、コミュニケーションの基本はもちろん、異文化間やSNS におけるコミュニケーションなど、幅広いテーマを学びます。授業では、リーディングパケットという文献をまとめた冊子を使用します。いくつか決められたテーマもありますが、半分ほどは自分たちが学んでみたいコミュニケーションに関するテーマで作成されます。このリ

ーディング packets を使いつつ、日常生活にあるコミュニケーションについて皆で意見を出していきます。しかしこの授業は、ただ意見を出すだけではありません。リーディング packets にあるテーマを一つ選び、そのテーマを授業として発表するのです。packet の資料から重要なものをピックアップしてまとめる、図書館で参考文献を探す、そしてハンドアウトを作成する。発表の準備には長期間かかり、時にはわけがわからなくなることもあります。しかし、先生がサポートをしてくださり、完成したときの達成感は表現できないほど大きいものなので、やりがいがあります。

「なんか大変そうだな」と思ったあなた、大丈夫です。真面目に取り組む分、思いきり楽しめる飲み会や勝浦合宿などのイベントもあります。「真面目にやるときは一生懸命やる、楽しむときは思いきり楽しむ」、そういったゼミです。文頭を読んで「確かにコミュニケーションって何だろう？」と思った方は、原先生のゼミへの参加をおすすめします。



卒業研究

4年 鈴木 雄二

原ゼミの卒業研究は、専門領域研究講座のメンバーそのままです。男子2名、女子6名の計8名の少人数で、授業は明海大学図書館の2階「ラーニングcommons」で行われました。授業がスタートし、原先生から卒業論文として作成するか、卒業レポートとして作成するかを問われた際は、いよいよ大学生活最後の一年を告げる一言だと感じ

ました。

前期は、就職活動と重なってしまったこともあり、メンバーの集合率が悪かったため、各々寂しい気持ちを隠しながらの授業となりました。しかし、それぞれ研究テーマを設定し、問題の抽出を行い、自身の研究テーマを狭く深く考える貴重な時間でした。そこから研究の方向性を想定しましたが、必要な知識の習得が不可欠でした。そこで、私たちは先行研究を入念にレビューし、図書館で関連する文献やテキスト、書物を探し出し、テーマや内容の修正を行いました。それからはアウトラインを作成し、メンバーそれぞれが中間発表を行って、前期の授業は幕を閉じました。

そして、夏休みという長いハーフタイムが終了し、いよいよ後期がスタートしました。しかし、序盤から壁にぶつかり、試行錯誤の日々が続きます。それは調査票の作成でした。主にアンケート調査が中心で、日頃何となく回答していたアンケートを、自身が真剣に作成する日が来るとは予想していませんでした。無事にアンケート調査票などが完成し、実際にデータ収集を行いました。そこからデータ分析を行い、データの解釈と考察を書き上げました。そのあとは、全体を書き上げる作業を行いました。これもまた大変で、まるで美しい音を奏でるピアニストのように、キーボードで文字を打つ日々が続きました。そしてついに完成し、原先生のご指導のもと、修正作業や校正作業を行い、無事に仕上げることができました。

授業以外にも、10月には勝浦のセミナーハウスで合宿を行いました。この1年間を振り返ると、大変な1年でもありましたが、とても有意義な1年を過ごせたと確信しています。最後に、2年間過ごした原ゼミのメンバーと原和也先生に、格別のご高配にあずかり、厚くお礼申し上げます。感謝の言葉を添えて、ここで筆をおかせていただきます。



松井順子ゼミ

June-ko's Seminar - Class of 2019



Kazuki Endo

Chihiro Tsumuraya

Kanon Nakagawa

Charlie Ma Yulou: I learned new translation skills that I never heard about before I joined the seminar.

Eiji Akihito Masuda

Hina Yoshida

Akira Asai: I had a great time with my mates.

Hiro Oyama: I've learned that when you are working as an interpreter, you have to be quick on your feet. It is one thing to speak two languages, but quite another to be an expert in the cultural context.

Ryu Kumadaki

Thuy Nguyen Thi: I learned a lot of skills to become an interpreter. This might help me a lot in the future.

Koki Nishikawa

(In order of year and Japanese alphabet 学年・あいうえお順)

June-ko's Seminar - Class of 2018



Ayumi Ishii: I'm glad that there are a lot of opportunities to speak English.

Kazuki Endo

Mizuki Kikuchi: I really appreciate what you have done for me. You are the best teacher, and I will miss you. I will not forget your kindness. I'll do my best in the future.

Miki Kitamura: I think this class is most fun.

Jessica Wu Jiabao: If you want to improve your speaking skill and listening skill, please come!

Naoki Sadayama: Professor Matsui and colleagues, I'm really happy I took this seminar. In principle, Japanese is banned in class. → I definitely recommend it!!

Kaoru Tsutsumi

Sae Tochigi: I learned a lot and I translated well.

Kanon Nakagawa: It was fun talking in English, and using the computer.

Takaaki Nishikawa: My English skills improved quickly, and translating the speech was interesting. This was new for me.

Moe Hatoya: I learned how to present in English.

Aki Fukushima: Professor Matsui spoke mostly in English, so I learned a lot.

Yuka Hoshino

Charlie Ma Yulou: Taking a class in English is really a great chance for me to improve my English. It's also very important to keep exercising my English skills.

Yuka Miyama: It's almost all English in class, so I improved my English.

Soshi Hayashida: I learned about presentations, and I got used to telling people my opinion in English. (In order of year and Japanese alphabet 学年・あいうえお順)

卒業研究題目一覧

津留崎毅ゼミ

1	岩館 百香	キラキラネームを取り巻く環境と影響 —果たしてキラキラネームは、“キラキラ”しているのか—
2	小澤 奎介	美容・健康分野の英語表現について —カタカナ英語を中心に—
3	木村 絢也	キラキラネームとは何か —キラキラの度合いを定義する試み—
4	鈴木 香里	「表示性」と「表現性」によるネーミングの研究 —キュウリの品種名の特徴を用いて—
5	砂川 真穂	子どもの名付けに対する世代間相違についての研究 ～キラキラネームを手掛かりに～
6	田中真理子	広告に使用されているカタカナ英語の研究
7	程 芳琴	日本語における「自称詞」と「対称詞」の使用原則についての研究 —日本語学習者と日本人学生を比較して—
8	寺崎莉々亜	お母さまから（お）母さんへ —2つの映画から読み解く言葉遣いの変化—
9	原田ケイト	カタカナ英語と和製英語の研究 —カタカナ英語はどれだけ理解されているか—
10	樋口 亮麻	バラの品種名についての研究 —表示性と表現性を要諦に—
11	藤田あまり	キラキラネームの実体と功罪 —親はなぜ子にキラキラネームを付けるのか—
12	三上 恭平	柑橘類のネーミングに関する研究 —表示性と表現性を手がかりに—
13	溝田優太郎	キラキラネームが齎す影響
14	山下 佑哉	日本語と英語の対話における「役割付与」の違いについて
15	渡邊 美保	表示性・表現性に基づくネーミングの研究 —国産トマトの品種名に焦点を当てて—
16	川上ジロウ	知っていると思っていた「カタカナ英語」 —英語のカタカナ表記か和製英語か—

大津由紀雄ゼミ

1	東 奈菜美	中国の影響力 —中華人民共和国の今までとこれから—
2	荒川 優花	東京ストリートファッションと私たちの密な関係

3	荒木 龍生	ニューヨーク・日本におけるスラムと社会問題
4	井口 優那	社会への出方 ―日本とアメリカの差って？―
5	上村芙未加	純粹なところ
6	九貫 芽衣	なぜ日本人は英語が苦手なのか ―世界と比べる日本の英語教育―
7	槌屋 美保	日米税金比較
8	西田 遥	日本人の仕事に対する意欲について
9	横山 里菜	少子高齢化社会の過去と未来 ―日本の人口推移から考える―
10	渡辺 美稀	日本の夜における観光事業の実態

【考える習慣をつけるきっかけになるといいね。卒業、おめでとう！／大津由紀雄】

河原伸一ゼミ

1	安部 涼香	ジェイエステティックのブルーオーシャン戦略
2	飯島 亜未	プラスチックごみの未来に関する考察
3	長田 悠青	人間社会におけるネコの役割と将来性に関する考察
4	加賀ありさ	資生堂の成長戦略
5	小林穂乃香	物流業界の今後 - 宅配便に見る物流の歴史と課題
6	澤 春花	認知症患者に対するセラピー ―アニマルセラピーを中心に -
7	高尾 亮太	e スポーツの可能性に関する考察
8	新鞍 美奈	青についての考察 - プラス効果とマイナス効果を中心に -
9	西沢亜衣梨	IT 教育を用いた長岡市の活性化に関する研究
10	山本 美香	死生観に関する考察
11	山本 瑞帆	破綻のないストーリー構成に関する考察

金子義隆ゼミ

1	小川 隼斗	生徒主体のやり取りに重きを置いた授業研究
2	小野 勝春	生徒にもっと英語を使ってもらうためのアクティブラーニング
3	鈴木 海優	主体的で深い学びを意識した授業研究
4	篠原百合香	現代社会の課題について意見を伝え合う活動を取り入れた授業研究
5	湯谷 葵	英語によるコミュニケーションを用いて英語学習の意欲向上を図る授業研究

【ゼミで学んだこととオリジナリティを融合させた研究になりました！ 金子義隆】

川成美香ゼミ

1	井上 淳也	アメリカ社会と黒人英語の関係性 —映画『42～世界を変えた男』の会話の中での分析— (卒業論文)
2	大嶋 健仁	『テイルズオブヴェスペリア』北米版のキャラクターにみられる 男女の会話行動の比較 (卒業論文)
3	二平みなみ	日英語バイリンガルのポライトネスストラテジーと非言語行動の 特徴 —アメリカの滞在開始時期と滞在年数からみえる比較— (卒業論文)
4	廣澤 匠	イギリス社会階層とコード理論 —『ハリーポッターと賢者の石』での分析— (卒業論文)
5	福田 綾香	アメリカ英語における男女比較 —report-talk と rapport-talk を 中心にみる親しい異性間での会話スタイル— (卒業論文)
6	松山 桃子	『LA LA LAND』の登場人物からみるポライトネス行動 (卒業レポート)

【3年次ゼミ論から学問的に深く発展させた卒業研究となりました。川成美香】

Jesse Glass ゼミ

1	DAO HAI THANH	Video Game Culture among Young People in Vietnam
---	---------------	--------------------------------------------------

【An excellent look at the current state of youth culture in Vietnam. Jesse Glass】

小林裕子ゼミ (提出順)

1	白河 光薫	アメリカの銃社会 —アメリカ合衆国における National Rifle Association のロビー活動—
2	市村 晏奈	Veganism は世界を救うのか —グローバル化と食の多様化—
3	松寺 璃佳	アメリカ合衆国政治の変遷 —大統領スピーチ分析を通して—
4	滝田 沙奈	音楽に触れる人生 —音楽教育・音楽経験によって生まれる自我—
5	岡澤 杏樹	アジアを中心とする貧困について—所得分布の均衡を目指して—
6	小山柚衣子	プラスチック問題と化粧品 —環境に優しい化粧品の普及を目指して—
7	高橋 幸大	田園回帰について —地方自治体の移住補助政策—
8	小坂 悠登	サッカーを通して学んだリーダーの条件 —松下幸之助に学ぶ—

9	遠山 愛永	日本の男女平等について —男女雇用機会均等法と男女共同参画社会基本法を巡って—
10	波多野巨也	スポーツにおける「流れ」の発生と影響 —伝達力と感知能力—
11	山田 修 アリラザ	海洋汚染について —世界の海洋資源のゆくえ—
12	佐藤ユアン	ダウン症について —忘れ得ぬ友—
13	高橋 優季	地球温暖化と住宅 —地球温暖化の現状と住宅改良について—
14	安藤 正樹	日本におけるEコマース競争 —二大企業の覇権争い—
15	Dinushi Vihara Rathnayaka	日本留学実現への道のり —これから日本留学を目指す皆さんへの実践的アドバイス—

【個性と信念に満ちた渾身の卒業研究です。頑張りましたね(^0^)/小林裕子】

嶋田珠巳ゼミ

1	赤堀 開人	「ことば」を守るために—アイヌ語の歴史を踏まえた考察
2	石川 昂佑	“輸出された”日本語の言葉 —言葉はどのようにして借用されるのか
3	伊藤有希菜	フォーリナー・トークにおける日本語話者の話し方 —相手に応じて何が変わるのか
4	金尾 貴希	MCバトルにおける韻の湧きどころ
5	越川 祐樹	あげみ(ざわ)、やばみ、食べたみ、社会人み —近年使用されている言葉の万能調味料? 「-み」
6	崎代 里紗	消滅危機言語「ハワイ語」 —言語消滅で失われるもの、言語復興に向けた取り組み
7	樋川 優美	二つの番組から観る、司会者と出演者が作る番組の流れ
8	藤原 颯人	ファッション雑誌に見る日本語の性差
9	松下 茉央	中学英語教材の「不自然な日本語」と「ワンパターンの返答」 —映画との対照
10	村田 涼	学習歴の浅い日本語話者の発話分析
11	吉田 茉由	アルバイト敬語の印象
12	若月 啓貴	日本語と英語の謝罪の言葉表現—映画の翻訳を手がかりに

【ゼミ生全員、卒論完成。それぞれに、あなただからこそ書けたもの。嶋田珠巳】

高野敬三ゼミ

1	荒井 克也	主題・戦後、日本の英語教育はどのような変遷を経て、どのような方向に進むのか 副題・学習指導要領がどのように変化をしてきたのか
2	内山 葉月	主題・戦後、日本の英語教育はどのような変遷を経て、どのような方向に進むのか 副題・授業内の効果的な英語の歌の扱い方
3	佐々木 健	主題・戦後、日本の英語教育はどのような変遷を経て、どのような方向に進むのか 副題・英語嫌いの原因と生徒が学びたくなる授業づくり
4	富塚 虎太	主題・戦後、日本の英語教育はどのような変遷を経て、どのような方向に進むのか 副題・各学習指導要領の分析、中学校英語について
5	脇山 清美	主題・戦後、日本の英語教育はどのような変遷を経て、どのような方向に進むのか 副題・日本の英語教育の変遷と日韓の小学校英語改革 —世界で活躍できる日本人育成のために—

瀧田健介ゼミ

1	井上 裕貴	英単語の多義性
2	甲斐 達大	地名を表す固有名詞に the が付く理由について
3	田口 直也	ゲーム制作ソフトを通じた学習ソフトの制作

【ことばの「なぜ」を必死で探し考えた結果です／瀧田健介】

内藤貴子ゼミ

1	岩田 理誉	キリスト教の聖書から再読する『ライオンと魔女』
2	高島 杏奈	18世紀と現代の結婚観 ～『高慢と偏見』を読んで～
3	高橋 茉鈴	動物虐待から『フランダーズの犬』を読み解く —国によって人気に差が出た理由（イギリス・日本）—
4	戸室菜々子	少年の心を支える王国の形成・崩壊・存続 —『海辺の王国』と『ケンスケの王国』の比較研究—

5	稗田 美穂	ソフィーの心の成長のプロセス — 媒体の違いから見る『ハウルの動く城』 —
6	藤戸 直美	絵本から読み取れる心理学的な物語 — 『愛をみつけたうさぎ』 から見つける心理
7	宮内 汐海	生まれた順番と性格のあり方 — 『若草物語』 から読み取れる 四姉妹の言動とそれに伴う性格の違い
8	矢野 直毅	絵本に登場する “nightmare” の意味： <i>There's a Nightmare in My Closet</i> から考察する悪夢と childness
9	山森勇一郎	ディズニーはなぜアメリカで成功できたのか — 作品の比較とディズニーが定着するまでの分析 —

【作品と向き合い独自の論点を見つけて掘り下げる過程は、内的な冒険でした！内藤貴子】

ケイコ・ナカムラゼミ

1	石井 美帆	となりのトトロ～日本語と英語の違い～
2	ウパディヤイ アルジュン	English Pronunciation in South Asia
3	大里 明日香	外来語についての考察
4	大山 真美	アンドロイド（ロボット）と人間の今後についての考察
5	上川 哲	日本語、韓国語と英語の違い 呼称の観点から
6	小山 龍之介	日本とニュージーランドの違い
7	齋藤 勇輝	日本と世界の方言のあり方について
8	斉藤 雄平	ポジティブなモチベーションを継続させる方法
9	佐藤 栞奈	日本の英語教育
10	立石 結花	アメリカ英語とイギリス英語
11	田村 浩都	イマジナリーフレンド（IF）・イマジナリーコンパニオン（IC） について
12	中川原 寿人	日本のアニメ・マンガから日本語を学ぶことで見られる影響
13	李 潘燦	Which one is harder to learn, Chinese, Japanese, or English?
14	渡邊 彩	幸福度について～世界の幸福度の違いから日本の幸福を考える
15	パティラジェ チャーマニー	Trilingualism

【 Great work! Wishing you all the best in your future adventures!／Kei Nakamura】

原和也ゼミ

1	坂入可奈子	LINE の既読無視による不安・即時的返信へのとらわれとつながり感・親和動機との関連性
2	佐藤 るり	1対1の対人関係における相性について
3	下山 純	左利きのマイノリティ性について
4	鈴木 雄二	騙すときと騙されるときにおける学生の感情について
5	新妻 稚菜	オンライン・コミュニケーション上の適切な距離感について
6	梁川 知里	駄目出しの潜在的な能力と誤解の関係性
7	渡邊 夏穂	主観的幸福感と家族関係についての研究
8	鈴木 萌	日本人学生における日常的な友人グループ行動について

【自己と対峙し、考え抜き、自分の限界を超えた経験は、大きな財産です！／原和也】

松井順子ゼミ

松井順子ゼミ			Interpreter
1	Ayumi Ishii	Merits of Learning English	鳩谷 萌
2	Kazuki Endo	Internet Supermarkets	西川 隆昭
3	Mizuki Kikuchi	Overcoming Poverty	中川 佳音
4	Miki Kitamura	Animal Slaughter and Protection Organizations	福島 亜希
5	Jessica Wu Jiabao	How to Keep Healthy	馬 宇楼
6	Naoki Sadayama	World Peace	林田 宗士
7	Kaoru Tsutusmi	Expressing Emotions	深山 裕加
8	Sae Tochigi	Spanish Festivals	星野 優華
9	Kanon Nakagawa	Tattoos	菊地 瑞稀
10	Takaaki Nishikawa	The Charm of Traveling in Hong Kong	遠藤 一樹
11	Moe Hatoya	Caffeine Addiction	石井 歩
12	Aki Fukushima	Not Giving Up	北村 美貴
13	Yuka Hoshino	Social Classes	朽木 彩恵
14	Charlie Ma Yulou	Waiting for Godot	呉 佳宝
15	Yuka Miyama	Smartphones and Digital Dementia	堤 馨
16	Soshi Hayashida	Sleep	定山 直樹

【When there's a will, there's a way!意志あらば道が開ける／June-ko Matsui】

2018 年度 英米語学科 卒業論文発表会



2019年3月7日(木)9時30分～11時30分、2501教室にて2018年度卒業論文発表会が開かれました。各人15分間の発表に続いて、指導教員からの講評と質疑応答が活発に交わされました。大学で培ってきた語学力、教養、思考力、専門的知識やスキルの集大成が、4年間の学修成果として、卒業論文の形に結実しました。

発表者	指導教員	題目
戸室菜々子	内藤 貴子	少年の心を支える王国の形成・崩壊・存続 — 『海辺の王国』と『ケンスケの王国』の比較研究—
廣澤 匠	川成 美香	イギリス社会階級とコード理論 — 『ハリーポッターと賢者の石』での分析—
井上 淳也	川成 美香	アメリカ社会と黒人英語の関係性 — 映画『42～世界を変えた男』の会話の中での分析—
横山 里菜	大津由紀雄	少子高齢化社会の過去と未来 ～日本の人口推移から考える～
村田 涼	嶋田 珠巳	学習歴の浅い日本語話者の発話分析

海外英語研修 CQU（オーストラリア）

この英語研修は2018年2月から3月に行われたものです。

各学生の学年は2018年度のものになっています。

CQU 研修の思い出

3年 春名 貴博

この海外研修に参加しようと考えたのは2年生の夏頃です。実は、2017年度の夏休みを利用して、夏の語学研修プログラムである「カンタベリークライストチャーチ大学研修」にも参加させていただき、その研修を通して、異文化に興味を持ちました。そして、このオーストラリア研修で、「他国の文化にもっと深く関わってみたい」、「オーストラリア文化を体験して学びたい」、その他に、「今の自分自身の英語力がどのくらい通用するのかを試し、更なる英語力の向上を図りたい」と考え、この研修への参加を決めました。



研修の参加が決定してから嬉しさや楽しさといった気持ちがありました。初めてのホームステイだったことと、オーストラリアの生活に正直なところ、不安や心配、緊張などがそれらよりも勝っていました。シド

ニー空港に到着し、ホームステイ先に到着するまで、どのようなホストファミリーなのか見当もつかなく、加えて英語で意思疎通をしっかりとできるかどうか、様々な不安が交差していました。しかし、実際に会ってみると、ファミリーが私達に何の抵抗もなく話しかけてくれ、様々なことへ気遣いもしてくれました。さらには、ファミリーの子ども達が、私達が来たことにとても喜んだ姿を見せてくれて、不安や緊張が嘘のように消えました。その後は、何気なく話すことができ、充実したホームステイ生活を送ることができました。

平日は午前中に CQU で授業を受け、午後はシドニー市内観光や自由行動といったように過ごしました。休日は、シドニー郊外へ観光に行くこともあれば、ホストファミリーと過ごすなど毎日違った過ごし方ができました。平日の午前中に行われる授業では、オーストラリアの先住民であるアボリジニや、オーストラリアの文化や歴史、スポーツなどについて

て学びました。雰囲気は、言うならば、Integrated English のようでした。アクティブな授業で楽しく、授業の終わる時間がとても早く感じました。平日の午後に、研修のプログラムでシドニーの観光名所へほとんど行くことができるの



で、自由時間や休日には自分好みの計画を立てることが容易にできます。そのため、ゆっくりお買い物やちょっとマイナーな場所へ行くなど、自分に合った過ごし方ができるようになっていました。

私は、この研修を通して、英語はもちろん、オーストラリアの人々の人柄や生活、そして多文化主義の大切さや楽しさなど、多くの貴重なことを経験し、知ることができました。1ヶ月と短いオーストラリアでの生活でありましたが、1日1日を大切に過ごし、帰国した後の生活で活かせるような価値あるものになりました。

オーストラリアで得たもの

2年 小池 まい

私は1年生の春休みを利用して約一か月間、オーストラリアのシドニーにあるシーキューンバーシティ大学でオーストラリア英語、アボリジニの文化についてなどたくさんのことを勉強してきました。勉強だけでなく、シドニーの有名な観光地をたくさん観光しました。観光地ではその都度引率の先生から観光地について、どのようにして成り立ったか、いつ出来たかなどの説明がありました。引率の先生の英語が難しく、理解できないこともありました。私の友達には事前に観光地について調べていたみたいで、先生の解説を理解できたようで私もそうしたらよかったなと後悔しました。特に私が最も気に入った場所は、ブルーマウンテンズにあるスリーシスターズとマンリービーチです。ブルーマウンテンズは広大な自然があまりにも非日常でとても感動したことを覚えています。崖の上から



見下ろす山々はとても立派で、面積は浦安市以上もあると聞いた時は驚きました。マンリービーチは観光客はもちろん、地元の人々に賑わっていてローカル感を感じることが出来ました。紫外線はとても強かったのですが、光り輝く青い海と白い砂浜のコントラストはとてもきれいなものでした。

研修中は、ホームステイをしていました。

食事はホストマザーが作ってくださり、オーストラリアの食文化に触れることができました。また、ホストファミリーと会話することで英語を話すことにためらいを持つことも無くなり自分に自信が持てるようになったと思います。家から学校までは、バスと電車を乗り継いで1時間ほどでした。慣れてきてからも電車を間違えることもあり、そのたびに地元の人々に助けられました。バスの中で地元の人と会話したりなど、地元の方のフレンドリーさには驚きました。

この研修に参加しようと思った理由は、大学在学中には一度は海外研修をしたいと高校時代から考えていたのと、オーストラリアという国に興味があったからです。この研修を通して様々なことを学びました。中学高校の社会の授業では深く学習しなかったアボリジニのことやオーストラリア英語。世界の人口増加やLGBT問題など。自分の無知さを改めて痛感させられましたが、これからの勉強のモチベーションにもつながりました。英語漬けの環境が、英語を話すことに感じていた苦手意識をなくしてくれたと思います。同時に自分の英語力のなさを痛感し、帰国したらさらに勉強に力を入れようと思わされました。もし、この研修に参加しようか迷っているならばぜひ挑戦してほしいと思います。



海外英語研修 UCLA (アメリカ)



初めての海外研修

3年 太田 理沙

私にとって今回の研修は、初めての海外というのもあり、出発前まで不安や楽しみで一杯でした。実家暮らしというのもあり、身の回りのことを自分でできるのか、ルームメイトと問題なく過ごせるのかなど一抹の不安はありました。しかし、研修先での生活が始まると、私の不安はとてもちっぽげなものだと気づきました。常にフロントに受付の人がいるので、何かわからないことがあってもすぐに聞けますし、引率の先生もいるので、安心して寮生活を送ることができました。

いざ、プレイズメントテストも終わり、いよいよ海外の人々と異文化交流できると夢見ていましたが、その希望とは裏腹に、私の午前のクラスは全員日本人で、私の夢は儚く消えてしまいました。また、ほとんどの学生が有名私立大学から来ているということもあり、なかなか自分の意見に自信が持てませんでした。授業後、中邑先生にそのことを伝えると、「他人と比べる必要はないよ。」という励ましのお言葉をもらい、あまり他人と比べないよ

うにしました。少しずつではありますが、自分の意見を正確な英語でなくても言うように意識しました。日本にいるときでも、文法を気にするがゆえに発言する機会を失うことがあったので、個々の単語をつなげたり、あるいはジェスチャーでも言わないよりましだと思ったり、つたないながらも発言するように心がけました。

また、授業だけではなかなか発言できなかったのも、他に英語を話す機会を自分で作るようにも心がけました。お昼には、スターバックスやサブウェイに行って食べ物を注文してみたり、観光先では、迷子になったとき、現地の人に道を教えてもらったりしました。さらに、なぜか UCLA Extension にいた老夫婦に、私の研究課題についての質問をしたり、寮の受付の人にも同様なことを聞いたりもしました。皆さん、嫌な顔ひとつせず、スムーズにフレンドリーに対応してくださり、アメリカのよさも身にしみて感じました。改めて考えてみると、「もし日本で外国人に突然話かけられたら、私だったら、同じように対応できるかな、私だけじゃなく、日本人は、ロサンゼルスの人と比べて外国人慣れしていないんじゃないか」と思いました。



今回、このような貴重な経験を通して、自分がいかに未熟か痛感しました。この悔しさをばねに英語学習に力を入れたいと思います。また、現地の人々と話したり、観察したりしていて、アメリカには実にさまざまな人種がいて、それに柔軟に対応しているんだということを感じられました。特に、私が感銘を受けたのが、車椅子の方々に対しての待遇です。バスに乗車の際は、車椅子の方が乗りやすいようにスロープが出てきて、遊園地では、車椅子の方でも乗れるアトラクションが意外に多くありました。アメリカでは、車椅子の方でも自立して行動できるように、そのような工夫がされていて、日本にも体の不自由な人への手助けがもっとできるのではないかと思います。

英語を話すことへの自信

3年 神谷 星香

私は、この UCLA の研修を通じて様々な体験をすることが出来ました。その中でも特に学んだことは“積極性”でした。日本の大学の授業スタイルは通常、講義を聞きノートを取るような受動的な授業が主でした。明海大学では、アクティブラーニングが日常的に取り入れられ、生徒は能動的に学ぶことで「認知的、倫理的、社会能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成」を図っているため、アクティブラーニングが進んでいることで私も海外の大学で学んでも付いていけると考えていましたが、私の想像を遥かに超える学習方法が UCLA にはありました。午前中の授業ではアカデミックやカルチャーについて学んでいたのですが、先生が問題を出しても先生が答えることはありませんでした。生徒



が積極的に答えを発表し、他の生徒もまた同じように意見を投げかけていました。授業内もただ同じ椅子に座って授業を受けるだけではなく、様々なクラスメイトと教室内を移動するなどして積極的に意見を交換しました。教室のみならず廊下も利用するような授業内容もありました。また、午後の授業は特に面白く、会話が主の授業内容となっていた為学生の意見が多く取り入れられていました。例えば、発音の授業でも「th」の発音はスペイン語を母語とする学生が積極的に披露し、先生も含め全員が生徒になったように発音をしていました。また、最後の課題がプレゼンテーションだったのですが、そのグループ自体も生徒主体で積極的に決めていたり、グループワークでも私のグループでは生徒同士で得意不得意をお互い見つけて、互いに文法を直したり、発表の構成を練って台本を作ったりしました。私はイントネーションをグループメンバーに上手く伝えて全体の発表が良くなるよう努力をしました。学生が主体的に動き、聞いていて楽しいプレゼンテーションは何か話合ったりしました。発表の際には、様々な工夫を重ねた結果、発表者と聴講者が自然と会話をするようなプレゼンテーションを作り上げることが出来ました。アメリカ

での生活面でもこの積極性が活かされたのは、道に少し迷ってしまったときでした。UCLAに行く前の自分ならば絶対に知らない人に道を聞くことは出来なかったと思うのですが、道行く人にこのバスはどこへ行くのか積極的に質問しました。そして、研究課題のアンケートの際も生かすことが出来ました。この留学を通じて積極的に英語で発言することの大切さを学び、そして結果としては自分の英語に自信を持つことが出来ました。

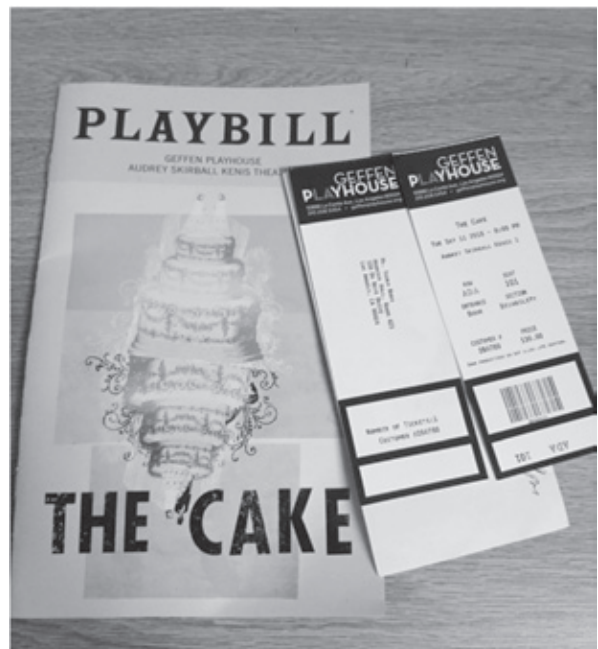
海外研修で学んだこと

3年 野田 優佳

私は8月26日から9月16日までUCLAの語学研修に参加していました。ここでは書ききれないくらいたくさんの思い出があるのですがその中でも特に印象に残ったことを紹介します。

まず、この研修に参加して確実に英語力が向上しました。行く前は3週間の留学でそんなに英語力が上がるのか心配でしたし、私が受講したクラスの全員が日本人だったので、留学というよりは旅行で終わってしまうだろうと思っていました。しかし実際はクラス以外でも買い物をするときやバスに乗るときなど日常的に英語を使う環境にいるため、自然と英語力は上がりました。私は行きの機内で”Winkle in Time”という映画を見ようと思ったのですが英語音声英語字幕で内容がわからず、開始5分で諦めてしまいました。しかし帰りの機内で同じ映画を見たら、内容がわかって楽しく見ることができ、ListeningとReadingの向上を実感しました。研修前は自分の英語力に自信がなく、自分の発音がネイティブに通じるのかも不安で、明海のネイティブの先生ともあまり話せなかったくらいでした。しかし私が受講していたDiscover LAという授業の移動のバスの中で先生から、乗客にインタビューして！と言われて話してみると、自分の英語が意外と通じるということがわかり、自信をもつことができました。帰国後の授業でも積極的に会話することができるようになり、将来英語を使った職に就きたいと強く思うようになりました。

次に印象に残っているのは、学校の



そばの Geffen Playhouse という劇場でやっていた” The Cake” という劇を観に行ったことです。私はミュージカルや演劇が好きで、LA で舞台を観たいというのが目標だったので、ただ観たいという気持ちでチケットをとったのですが、会場についてから、英語を聞き取り、さらに内容も理解できるか不安になってきました。実際、すべての台詞を完璧に理解できたわけではありません。しかし 90 分ある劇の内容は理解することができ、一緒に楽しむことができました。

観客はみんなリラックスして観ていて、面白いシーンではみんなであって、悲しいシーンではみんなであって、という風にとっても一体感がありました。さらにタイトルの通りに終演後にケーキが出たりして、最後まで楽しんでもらおうという工夫がありました。

さらに、この研修でわたしはさまざまな英語学習法があることを学びました。受講していた Culture のクラスでは、ドラマ” F.R.I.E.N.D.S” やクイズショー” Let’ s Ask America” を見て、そこから海外の文化やスラングを学び、曲” Parents Just don’ t Understand” から英語のリズムを学びました。私は今まで英語学習といえば英会話や文法と思っていたのですが、教科書や単語帳を使った勉強だけでなく、メディアから楽しく学ぶ方法もあることがわかりました。

今回の研修に参加して、学校で学ぶだけではなく、実際に行かないとわからないことがたくさんあることがわかりました。たくさん遊んで、たくさん学んだ 3 週間でした！

成長することができたアメリカ

3 年 前山 一弥

私は夏休みにアメリカの UCLA に語学研修に行きました。ここでは 3 週間、Intensive Communication English program (ICEP) に参加しました。このプログラムには様々な国の留学生が参加していて、多くの人と交流、コミュニケーションを取ることができます。私は午前 Academic と Culture、午後は Discover



LA という授業を選択しました。Academic と Culture の授業では、グループでのディスカッションやワークがほとんどで、プログラムの名前通りコミュニケーションを取ることを一番にしている授業内容でした。特に Academic が印象的で、課題が日常生活の中で自分が知らない、なぜ使われているのか分からない英単語を 1 つ持ってくるというものでした。クラスには 20 人以上生徒がいたので、必然的に知らない英単語を 20 個以上知ることができました。アメリカでの日常の会話では、日本の教科書などには掲載されていない多くのスラングが使われているため、とても興味深いものでした。

午後の授業は LA の名所について調べ、実際に訪れるというものでした。訪れたところはハリウッドやベニスビーチ、ゲッティ・センターなど、有名な場所ばかりでした。訪れた際に現地の人にインタビューするというのが課題であり、最初はとても緊張しました。ですが、すぐに話しかけることに慣れてきて、すぐにインタビューできるようになりました。現地の方々はとても優しく、私の下手な英語でも理解しようとして下さり、丁寧な返答も頂けました。

この授業の先生はマークというのですが、この先生はとても個性的で楽しい先生でした。マークは人と話をするのがとても好きなようで、移動中のバスで、乗客に話しかけては、これからどこへ行く、彼らは自分の生徒だと説明し、インタビューの練習として生徒と乗客が話す場を設けてくださいました。

この海外研修は私にとってかなり有意義なものになりました。私はあまり、人と会話するのが得意ではなかったのですが、初めて会う人と慣れない英語で会話しなければならなかったのが、毎日必死にコミュニケーションをとっていました。すると、だんだん人と交流する楽しさを知り、自分から話しかけるまでになりました。私はまだ、自分が将来どのような職業につきたいかなど全く考えられずにいたのですが、このような様々な人と交流、

会話をする職業もいいなと考えられるようになりました。このような経験をさせて頂いた明海大学にとっても感謝しています。

この研修に参加したいと思うなら、毎日の授業をしっかりと受けることが大事です。参加するまではとても大変かもしれませんが、必ず有意義なものになるので目指してみてもいいのではないでしょうか。



不安と楽しみ

3年 宮本 隆一

私は、2018年8月26日から2018年9月16日までの3週間、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、通称UCLAと呼ばれる大学の語学研修プログラムに参加しました。語学研修に参加しようと思った理由は2つあります。1つ目は、教師になったときに必要な異文化に対する理解を深めたかったからです。2つ目は海外に渡航経験がない自分が国内で学んでいる英語がどんなふうに通じるのかを体験してみたかったからです。私は、これら2つの目的を実現するために留学を希望しました。この海外研修に奨学生として参加したものの、私の英語レベルは決して高いものではありませんでした。また初めての海外であったということもあり、出発前から不安でした。ですが、このようなチャンスは二度とない思い、意を決して参加しました。成田空港を出発し、ロサンゼルス空港に着いた時には全てが初めてだったので不安はいつの間にか楽しみへと変わっていました。実際に始めて触れる現地での英語は、今まで見てきた映画や教科書とは比べ物にならず、キラキラして見えました。そして本当にアメリカへ来たのだという実感が湧きました。ですが寮へと向かうバスでの移動中にワクワクしながらも、明日から英語の授業が始まり日本語は通じないという不安が押し寄せてきました。しかしそんな不安を吹き飛ばすかのように現地での生活



は楽しいものであり、だんだんと英語に慣れていきました。私が授業や現地での生活を通じて学んだことは、上手く言えなくても口に出し、間違いを恐れるなということです。日本で英語を7年間も学んできたにも関わらず言いたいことが伝わらないことは、たくさんありました。寮に帰ってからその場面を思い出し、発音が悪かったのか、文法が悪かったのか、ノートに書き出してゆっくり考え、翌日使えるようになると自分に自信が持てると同時に今よりもっと話せるようになりたいと思うようになりました。そんな生活を3週間繰り返していくと間違えるより黙っているほうが恥ずかしいと思うようになり、積極的に発言のできる人間になることができました。休日は店員さんや寮のロビーの方に異文化についてインタビュー調査をすることができるようになり、だんだんと話すことが楽

しくなっていました。このように私は現地でしか体験できない経験を数えきれないほどしてきました。

私はこの海外研修を通じて、文法が少し間違っている相手にも相手に伝わりはするし、間違いを恐れてはいけないということ。また、状況に応じてこの英語を使うと伝わりやすいなども学ぶことができました。ただ、瞬間的に適切な文を組み立てる力の弱さや単語力の無さ、発音の悪さを度々感じました。

ですが、英語を使うことで多くの人とコミュニケーションをとることの楽しさを知りました。3週間という限られた期間ではありましたが、このような貴重な機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。

濃くも、あっという間の3週間

3年 山田 実紀

私は2018年8月26日から9月16日まで、アメリカのUCLA Extensionで約3週間の語学研修に参加しました。留学は1年の春休みにCQU(オーストラリア)の海外研修に参加したことがあったので、初めてではありませんでした。前回の留学で積極的に話すことが出来なかったため、英語力の向上が感じられずとても後悔していました。そこで今回は授業で積極的に発言する、現地の方とコミュニケーションをとる、この2点を目標にしています。しかし私がいたクラスはほとんどが日本人だったため、普段大学で授業を受けているのとほとんど変わらず、積極的に発言できそうにないかなと2,3回の授業を受けたあたりで思い始めました。そこで私は日常生活で現地の方と会話することに重点を置き生活し始めました。その後は少しでも分からないことがあった時には店員の方やスタッフに尋ねてみるようにしました。すると最後の週には尋ねると言うことが当たり前になっていました。もちろん、私がとっさに思い浮かべられる英語は大したものではありませんでした。しかし現地の方は理解してくれて、私でも分かるような簡単な単語で教えてくれます。私はそこで現地の方の優しさに触れることが出来ました。

午前の授業はAcademicとCulture、午後はDiscover L.A.をとりました。Academicでは単語力を上げるために日常生活で見つけた知らない単語を1人1つ持ち込みみんなで共有したり、あるトピックについて自分はどう思うかを述べたりする機会がとても多かったです。CultureはFRIENDSやBig Bang Theoryというテレビ番組を観たり、あるトピックについてゲーム形式でグループの人と話し合ったりと、楽しみながら授業を受けることが出来ました。午後のDiscover L.A.はロサンゼルスのことをもっと知るために、HollywoodやVenice Beachなどの有名な場所に実際に行ってみると言う授業でした。その授業ではバス

の車内や行った場所で人にインタビューをしなければならなかったのですが、控えめな性格の私にはインタビューをすることがかなり難易度の高いものでした。正直なところ、インタビューしても私くらいの英語力じゃ絶対に会話を続けることが出来ないだろうなと思っていました。でも1度話しかけてしまえばその場の雰囲気ですぐ話を続けることが出来ました。日本ではバスの中でインタビューするなんてまず考えられないし、絶対答えてくれる人なんていないと思うのですが、アメリカでは見た目が奇抜な方でも快くインタビューを受けてくれて、そこにもまた現地の方のフレンドリーさと優しさを感じました。



この3週間で、実際に現地で過ごしてみて分かるアメリカの良いところ、離れてみて分かる日本の良いところを知ることが出来たように思います。慣れない地での3週間でしたが、日々が新鮮で楽しくて、あっという間に過ぎてしまいました。このような貴重な経験が大学生のうちに出来たこと、本当に良かったです。ありがとうございました。

異文化を体感すること

2年 岩田 光立

短期間であれ長期間であれ海外に滞在すると、少なからず自国との違いを見つけ視点が広がるというのは頻繁に聞く話だと思います。私も今まで何度もそういったことを聞いてきましたし、実際に高校で留学を経験した際にも、漠然と日本との違いを実感したことを覚えています。その点で、今回のカルフォルニア大学ロサンゼルス校（以下 UCLA）への短期留学では、より明瞭に日本と他の文化圏との考え方の違いに触れ、言葉としてではなく体感として感じられたと思います。

まず違いを感じたのは授業である意見交換のワークの中でした。UCLA での授業では毎回のようにこのようなワークがあり、そこでは各国の家庭環境のことや社会問題について、起業するためにはなど様々なトピックで会話をしました。日本では、順番に意見を言い、相手の発言中は話をじっと聞くということが当たり前でした。しかし、UCLA では意見を言っている最中でも自分が疑問に思ったことや違うと思ったものに関しては、相手が話して

いる最中でも話に割って入るといのが多かったです。しかし、相手が言い終わるのを待たずその場で訂正や認識合わせを行うことで、より時間を効率的に使って内容の深い話まで出来ていました。

また他のディスカッションでは社内の男女差問題について話し、そこでも興味深い考え方の違いを発見しました。日本では、例えばそのような話をする際、男性側に焦点を当てて話されることが多いと思います。しかしそもそも男女差別のない国の学生に意見を聞くと、女性は何故それに甘んじているのか？もちろん男性にも非があるが、その状況をどうして女性は受け入れているのか教えてほしいと言われました。受け入れる女性に理由があると考えたとしても女性に何ができると考えると難しい問題ではありましたが、育った環境により思いもよらない考え方が出てくるということに面白さを感じました。

さらに、研究課題のアンケートを取っている中でも日本では見られない部分が多くありました。アンケートの内容は、大金を手にした際にお金をどのように使うかというものでした。その中で私の予想外に票が多かった項目は起業をするというものです。これは授業で学んだことでもありますが、人生において成功したいという考え方がアメリカ人にはあるということでした。結果以外でも声をかけたアメリカ人のほとんどの人がアンケートに協力してくれたことや、アンケートについての感想や自分の考え、アドバイスをくれる人が多かったことで、現地の方々温かさやフレンドリーな人となりに驚きました。

このように、バックグラウンドの違いから生まれる意見や大衆の雰囲気の違いは、私が今まで思いもしなかった発見を多く与えてくれました。今自分の中にある感動や、違った意見を受け止める心持ちをこれからも大切にしていき、様々な視点を持つための土台としていきたいです。



カリフォルニアで学んだこと

2年 大関 夕惟

私がUCLAに行って学んだことは3つあります。1つ目は、日本とアメリカの授業の違いについてです。私は現地でUCLA Extensionという留学生向けの言語学校に通い、英語や文化、ロサンゼルス観光地について学びました。日本の授業は、生徒が先生の方に体を向けて話を静かに聞き、黙々とメモをとるというスタイルです。しかし、アメリカは生徒同士が向き合っ席につき、ディスカッションを中心に授業が進められます。また、先生たちは静かな教室を嫌い、いつも私たちの反応を求めています。ディスカッションによって相手の考え方や価値観を知ることができ、そこから会話が生まれ楽しい時間を過ごすことができました。アメリカ人の会話力はそこから培われ



たのではないかと考えました。2つ目は、現地の人についてです。カリフォルニアは多くの移民を受け入れていたため様々な国から来た人が暮らしています。しかし、なかには英語を全く話せない人もいたということを知りました。私は英語を話すことのできない人はどうやってほかの人と意思疎通をしているのか気になったので現地の人に話を聞いてみました。すると、彼らはジェスチャーやイラストを使ってコミュニケーションをとっていると答えてくれました。私は、多くの人がスマートフォンの翻訳アプリを使っているのではないかと予想していました。ですが、正しく翻訳されないことや時間がかかってしまうことから実際に使っている人は少ないということが分かりました。3つ目は、文化についてです。私は、研修の事前学習でカリフォルニアの文化についてインターネットで調べてみました。すると、「アメリカ合衆国の文化に密接に結びついているが、スペインやメキシコ、中国などの様々な国の文化を融合させてできた」と記述されていました。融合させたということは、赤色と青色を混ぜると紫色ができるのと同じように、何か新しいものが生み出されて

いるのではないかと私は考えました。しかし、実際に現地で調査を進めると、特に新しいものが生み出されたということはなく、ダウンタウンにリトルトーキョーやチャイナタウンがあるのと同様にカリフォルニアで様々な国の文化に触れることができるという意味だったということを理解しました。私は、この海外研修を通してアメリカと日本の違いやカリフォルニアの実態について学ぶことができました。現地で見えたもの聞いたものを現在世界で問題視されている移民や貧富の差などの問題について考える自分の意見の判断材料として取り扱っていかうと考えています。

カリフォルニアで学んだこと

2年 玉置 鞠亜

約3週間、UCLAでの初めてのアメリカ生活は私にとって発見と学んだことが多く、とても楽しかったです。

滞在したロサンゼルスLos AngelesのWest woodという地域は自分が想像していたよりも比較的安全で過ごしやすかったです。ただ、そこから外れると街の雰囲気が変化することがあったので、出掛ける際には細心の注意が必要でした。アメリカに滞在しているときはいつでも「ここは日本ではない」という意識が必要です。平日は午前から午後にかけてUCLAのAmerican Language Centerにて授業を受けました。私が履修したCultureの授業ではその名の通りアメリカ文化について学びました。Academicの授業は主にアメリカのスラングやイディオム、文法を中心に学習するクラスでした。そしてDiscover L.Aという授業では実際にロサンゼルス周辺の名所や観光地を訪れ、その地の魅力や歴史を探り、現地の人々にインタビューも行い、とてもアクティブなクラスでした。



クラスは大半が日本人でしたが、私のクラスでは7~8人ほど他国からの留学生もおり、とても積極的に発言をしていました。グループ活動でも意見を進んで述べディスカッションを引っ張っており、とても感心させられました。私はとても恥ずかしがり屋で消極的な人間なので、進んで考えや意見を述べる

ことにはかなり苦労しましたが、クラスを通し、意見を述べるときには「合っているか間違っているか」を気にしすぎるのではなく、「どのようにすれば伝わるのか」が大切であるのを感じ、それを重視した考えを持つことができました。初めは上手いかわなくても、最後まで自分なりに努力し頑張ってコミュニケーションを取ろうと努めることが大事だと思います。クラスの一環の現地の人へのインタビューはかなり緊張しましたが、思い切ってコミュニケーションを楽しむことができました。間違えてもいいので積極的に話すことは自分の視野を広げることが可能であり、見えてくる世界もさらに新しく見えてくると学びました。

休日は友人と出掛け、人の多い所に行くことでアメリカは人や文化などの多様性がとても豊かであるのを実感しました。その場にいるだけで「自由」を尊重する国であることを理解できました。特に思い出に残ったのは様々な人に話しかけてられコミュニケーションを楽しめたことです。会話をしてくれた人々は職業や年齢、持つ文化も様々であったので、趣味の話や日本についてなどを話している中でいろんな価値観を知ることができ、とても素晴らしい経験を得ることができました。

今まで人生のほとんどを「日本」という私にとって小さな当たり前の世界の中だけで過ごしてきましたが、いろいろな人と触れ合ったことで、英語力だけではなく、身につけた文化の異なる人同士の共存や交流の豊かさ、そして己の意見や言葉の伝え方を吟味し重視することがコミュニケーション力を高めてくれることを学びました。とても感謝しています。



海外英語研修 カンタベリー・クライスト・チャーチ大学 (イギリス)



留学を終えて

2年 塚本 彩香

私は2018年の夏にイギリスのカンタベリー・クライスト・チャーチ大学へ海外研修で3週間行きました。中学校2年のときにオーストラリアへホームステイに行った私は、そのことがきっかけでそれまで好きでなかった英語が好きになりました。そして、またぜひ海外に留学へ行きたいと思い参加を決めました。学校のクラスは事前にクラス分けテストが行われ、割り振られました。生徒は明海の学生だけでなく、他大学の学生と合同のクラスでした。授業では主にゲームを通して学びました。例えば、すごろくのようなゲームで、1つ1つのコマに英文が書いてある、サイコロを振って止まったマスに書いてある英文に正しく答えるというものや、神経衰弱のようなゲームを行いました。ゲームを行うメンバーは毎回交換されたので、話したことがない人とも会話することが出来る良い機会となりました。その他にも、イギリスを代表する、ハリーポッターやシェイクスピアのロミオとジ

ユリエットなど身近で知っているものだったので楽しみながら学ぶことができました。最初は授業についていけるかという不安がありましたが、先生がとてもフレンドリーに明るく、そして優しく教えてくださったおかげでその不安は無くなりました。また、先生が「間違えてもいいから、何か発言してみて!」と言って下さったので、積極的に発言することができました。研修に行く前の私は自分からほとんど発言していなかったのですが、研修を通して自信が持て、発言する習慣が身につきました。これは今後の大学生活でも活かしたいです。カンタベリーでの暮らしはとても充実していました。カフェやレストラン、スーパーマーケット、洋服屋など多くのお店があったので、生活に必要なものはほとんどそろえることが出来ました。ただ、ほとんどのお店が18時で閉まってしまうのであまりゆっくりもしてられず大変でした。また、信号も日本とは違いとても短かったので、いつも渡りきる前に赤になってしまいました。こうした日本と違う生活でなれないことも多くありました。しかしその一方で、日本と違うからこそ良いと感じた点もありました。それは、街で会った人が話しかけてくれたことです。きっかけは、「その服いいね」や、日本人かどうかなど簡単な質問からで、そこから会話が始まりました。最初は驚きましたが、慣れたら自分からも話しかけてみました。日本では誰かに話しかけたり、話しかけられたりということがないので、日々いろいろな人と会話できるのは楽しかったです。この研修で私は自信を持つことができ、コミュニケーション大切さを学びました。また、多くの日本ではできない体験をすることが出来ました。留学に迷っている人はぜひ参加してみてください。きっと良い経験になると思います。

充実した3週間

2年 網 穂乃佳

私は8月18日から9月9日の間、イギリスのカンタベリーというところに研修に行きました。私自身、初めての海外で緊張や不安もありましたが充実した研修でした。なぜイギリスに行きたかったかというところイギリスにはきれいな建物がたくさんあり、またハリーポッターなどの多くの作品の舞台にもなっているため興味があり今回の研修に参加することを決めました。イギリスと日本では時差が8時間あり気温も日本でいう秋くらいの気温でした。そのため最初はそれに慣れるのが大変でした。

学校は夏休みだったため現地の生徒はいなく私たち明海大学の生徒と他の学校や留学生がいました。授業は3つのクラスに分かれ、各クラス20人くらいの少人数クラスでした。そのため分からないところは先生にすぐに質問できました。授業はIntegrated Englishのようであり、ゲームをしたり、ディスカッションをしたりしました。私は普段、発言するの

が恥ずかしくあまりしないのですが、先生が間違えてもいいから発言しなさいと言ってくださり、自分に自信を持って発言しました。先生方も含めクラスはとてもフレンドリーな雰囲気だったため過ごしやすかったです。私たちは寮だったので学校が終わると友達とご飯の買い物に行きました。何回か同じ部屋の子たちと餃子や生姜焼きといった料理を作りました。宿題が出た日は一緒に問題を解いたり教えあいながら勉強もしました。

週末にはロンドンに行きました。カンタベリーからロンドンには電車で約1時間くらいで着き、ロンドンはたくさんの観光客で賑わっていました。洋服や雑貨を見たり、大英博物館などの有名なところにも行ったりしました。大英博物館では本物のミイラやロゼッタ

ストーンなどたくさん
のものが展示されてい
ました。また、イギリス
で有名なアフタヌーン
ティーをしました。その
他にも建物や街並み
は日本とは違う雰囲気
でどれも美しかったです。
さらにイギリスの
方たちは優しく、実際



スーパーのセルフレジで私が困っていたら優しく教えてくれました。その他にカンタベリーの生活では大きな大聖堂があり学生は無料で見学することができました。中にはとてもきれいなステンドグラスがあり感動しました。イギリスに行ってみて日本との文化の違いや習慣の違いを改めて感じました。今回の研修で私は初めての海外ということもあり不安や心配もありましたが現地の人達は優しく、研修先で多くのことを学んで視野が広がりまた、自分に自信ができました。この貴重な経験を将来、活かしていけるようにしたいです。

短期留学で学んだこと

2年 木山 朋音

私は、大学入学前から短期留学に行きたいと考えていました。その理由は、高校生の時に行った短期留学がとても楽しく、自分の英語の力が実際に上がったからです。大学一年のときに、行こうと思っていたのですが、海外で生活していく自信が無くなりあきらめました。しかし、今年になって行こうと決意したきっかけは、同じ部活に所属している留学生でした。ある日、彼にどうやって日本語を上達させたのかと尋ねると、「日本人といっぱ

いしゃべったからだと思う」という返事が返ってきました。もちろん、喋っただけではなく、彼自身が勉強をしたからだと思いますが、私は、この言葉を聞いて留学することを決めました。

生活方式が高校の時と違い、寮だったので日常生活に必要な物がたくさんありました。その中で、日本から持って行けばよかったと思ったものがサランラップ、塩・砂糖、洗剤、レトルト食品です。まず初めに、サランラップを日本から持って来た方が良い理由は、イギリスにもラップはあり、刃も付いていますが全く切れません。次に、レトルト食品です。これは、イギリスで本当に重宝しました。たった三週間、と感じる人もいるとは思いますが、研修の後半になるにつれて日本食が食べたくてきます。そんな時にレトルト食品があるととても便利です。特に、お勧めなのは百均で売っているレトルトのお味噌汁や、混ぜるだけでパスタが出来る粉末パスタソースです。

授業は、午前午後に分かれていてリーディングやディスカッションをしました。初日にクラス分けの簡単なテストを行いました。

Intermediate クラスに配属された学生がほとんどで、そのクラスには既に日本人学生がいました。その学生も私たちと同じ三週間でした。現地で頂いた、授業に使う教科書の問題文の書き方が日本の英語の教科書と違い、初めのころは、何を聞かれているのかわかりませんでした。三週間経つと、ニュアンスがわかるようになってきました。最初の一、二週間は発言やディスカッションをするのがメインでした。初めは緊張して発言することをためらっていましたが、日が経つにつれて積極的に発言をするようになりました。積極的にいかないと自分のためにもならないし、行った意味が無くなるので授業中は積極的に参加しました。



今回、海外研修に参加して本当に良かったと思います。実際に、外国に行くことによってその国のリアルや文化などをテレビよりもたくさんを知ることが出来ます。また、他国にいと英語でしか通じないので頭の中で必死に英文を作ろうとするので、語の力は確実に伸びます。留学に行こうか悩んでいる方はぜひ行くべきです。

留学に行ってみて感じたこと、得たもの

1年 影山 瑞季

私が今回この留学に参加しようと思ったのは、自分に自信が持てない自分自身を変えたいと思ったからです。実は、私は高校生の時にフロリダでホームステイをした経験があります。高校時代は英語に一番力を入れていたのもあり、ホストファミリーと会話するのを楽しみにしていました。しかし、人見知りをする性格が出たり自分の英語力がまだまだなのを痛感したり、せっかく海外に行ったのに何もできずにホームステイが終わってしまいました。そのことがずっと悔しくて、「今度海外に行った時にはもっと話せるようになりたい！」と更に英語の勉強に力を入れました。大学生になって留学に行く機会をせっかくもらえたので頑張ろうととても意気込んでいました。



実際に行ってみると、やはり自分から積極的に話すというのはとてもできませんでした。同じクラスの人ほとんどが私よりも年上で、自分からすごく積極的に発言をしていて素直にすごいなと思いました私の方が年下だし、できないのはしょうがないと考えてしまったこともありました。しかしそのままでは今までと何も変わらない、何のために来たのかわからない、と思い、自分も少しずつ発言できるよう頑張ろうと思いました。2週間目になると、先生たちの授業にも慣れてきて、何を話しているのか話のほとんどを理解できるようになり、授業を心から楽しいと感じられるようになりました。しかし、3週間目に入った月曜日の午後の授業から、1つ上のクラスに行くことになりました。やっと先生の話の内容をおおまかに理解できるようになったのに、さらに難しくなってしまう、また自分に自信がなくなってしまう。そんな急なクラス替えがあった日の帰り際に、1人の先生が声をかけてくれました。難しくついていけないと話すと、「大丈夫！自信！You can do it!」と言われました。その次の日も少し無理そうな顔を見ると自信を持つようと、声をかけてくれました。私はその言葉のおかげで頑張ることができました。ほんとに感謝でしかありません。

この留学で私は、座学で文法の勉強も大事だけど、何よりも英語は実践したほうがよいと改めて思いました。文法だけを知っていても実際に話せなかったら何の意味もないと痛感させられました。何事も早い方がいいです。英語が全然話せないと私のように自分に自信持てない人も行動に移すことで、沢山身につくことがあると思います。私は今回の留学で自分の英語力だけでなく自分自身にも自信が持てるようになりました。これを読んで少しでも留学に行きたいと思ってくれると嬉しいです。

海外英語研修 アルバータ大学（カナダ）



経験と成長

3年 平野 みずき

私は去年、カナダのアルバータ大学で8か月の留学に行きました。今まで何度か海外に行く経験はありましたが、1か月以上の滞在は初めてでした。今回の留学は長く滞在できたので、今までの短い滞在では得ることができないことや体験できないことができました。

まず今までとの大きな違いは、日常生活で使う英語を中心に英語運用能力を向上することができました。その一番の理由は、友人をたくさん作ることができたからです。友人と積極的に食事に行くなど、自分自身で英語を使う環境を作っていました。初めは今よりもスピーキング能力が低く、いつも頭の中で日本語を英語に翻訳して会話をしていました。そのせいでなかなか話が続きずストレスを感じていました。しかし話す機会が増えて以前より自然に英語がでてくるようになってからは、会話をスムーズに広げることができて話すことが楽しいと感じるようになりました。以前の研修などは間違えることが恥ずかしいからといって挑戦することを避けていましたが、この留学で間違いを恐れずに頑張っってよかったです。

二つ目は、日本と他の国の文化・言語・その国の現状を比べ、様々なことを知ることや体験することができました。語学学校は様々な国から学生が来ていて、授業内でも外でも自分たちの国のことやお互いの国の印象などを話す機会がたくさんありました。いろいろな



話を聞いて、自分はまだ知らないことがたくさんあるのだなと感じました。また、イスラム教を信仰している友人がいて、個人的には宗教の話はどこまで踏み込んでいいのかと考える必要はないことだと思いましたが、彼女がイスラム教について様々な話をしてくれました。いままで友人と宗教の話をするのがなかったので、すごく興味深い話が聞けてよかったです。

三つ目は、自分で積極的に動き意志を伝える大切さを感じました。それは寮での生活でとても感じることができました。今回の留学ではもちろん家族も先生も同伴していなかったので、何事も自分たちでしなければいけませんでした。寮生活ではアリやねずみがでる

ことや排水溝のつまりなど様々なトラブルがあり、そのたびに寮のスタッフに連絡をしなければいけませんでした。そこのスタッフは一度軽く頼んだところでは迅速には動いてくれないことが多く、しっかり問題を伝え早く来てくれということが必要でした。また、ルームメイトと口論をすることがありましたが、お互いの意思をきちんと伝えて和解をすることもできました。日本では当たり前の“察する”ことがほかの国ではないので、自分の意志を言葉にすることがどれだけ大切なのかを感じました。

私は今回の留学で、これ以外にもたくさんの違いに気づき体験することで、視野も心も広げることができました。また、さまざまなことに挑戦して達成することの喜びを感じることができました。これらの経験と成長を、自分の将来につなげていきたいです。



GSM フィールドワーク参加報告

今夏のインターンシップで得た経験

2年 吉田 周平

私は2年生の夏、舞浜にあるヒルトン東京ベイさんに三週間の間インターンシップ生として働かせていただきました。参加した理由は2つあります。1つは、私は高校1年生のころからコンビニエンスストアでアルバイトをしています。そこでは私はベテランの域に達していますが、他の職種を経験したことがない事に気付き挑戦してみたくなったからです。2つ目は、せっかくの大学生活の長期休暇、何かに挑戦しないとったいなと思ったからです。そこで、参加を決意しました。



ヒルトンさんの accendo というレストランで働かせていただいたのですが、レストランで働いたことの無い私にとっては全てが初めてで新鮮でした。しかし、その反面、飲食店勤務に関する知識や経験が全くない事に改めて気づかされました。初めての職場、初めての同僚、上司、初めての職種の中で自らの視野の狭さを痛感

しました。そこからはまず仕事を覚えることに専念しました。バッシング、シルバー、ホワイトといった専門用語はもちろんのこと、仕事の流れを覚えることはとても大変でした。しかし、ヒルトンさんの皆さん、accendoの皆さんはとても優しく、忙しい中でも私達インターンシップ生を優しくフォローしてくださり、輪の中に入れてくださり、とても仕事がしやすかったです。ディズニーと共産関係にあるヒルトンさんの中はディズニーの世界観と共に働くことができました。

その上、外国からのお客様が多く宿泊、乃至宿泊以外のお客様が accendo をご利用下されました。そのお客様方へ接客する際に英語を使用し接客するのですが、学校で先生や友達と話すのとは全く違い、緊張の中英語を使用しながら接客しました。最初の方は緊張してしまい上手くいきませんでした。次第に慣れ徐々に接客できるようになりました。学

内で英語を話すだけでは決して体験出来ない経験と緊張感を味わうことができ、そこから自分自身を見つめなおすことができました。正直キツかったかと聞かれたならキツかったです。インターンシップの前半は最寄りの駅から始発で向かい、後半は終電で帰宅するという生活を送っていました。

しかし、その辛さにも勝る楽しさを得ました。新しいことに挑戦すること

と、新たな人間関係、全てを通して自分自身の見聞を広げると共に英語への意欲の再燃、向上心を得ることに繋がりました。インターンシップでの経験はその後の学校生活、アルバイトでの意識の改革に大きく影響しました。今後、社会に出て自分の足で立って戦っていく為の心作りを、ヒルトン東京ベイと accendo の皆さんと働いてきた中で得ることができました。



浦安市役所で学んだこと

3年 吉富 万祐

8月20日から31日の二週間にかけて、私は千葉県浦安市役所の広聴広報課で研修を受けて参りました。何事にも緊張してしまいがちな私は、この研修期間中でも同様に、配属先の皆様にご迷惑をおかけしたと思います。しかし広聴広報課の方々はとても優しく、不慣



れな私に様々なことを丁寧に教えてくださり、未熟な私をサポートしてくださいました。私自身も、そんな皆様の優しさに答えようと、誠心誠意自分のできることをやってきたつもりです。

広聴広報課はその名から分かる通り、広聴課と広報課で別れています。広聴課の主な業務内容は、浦安市民の意見

を直接聞いたり、市民が市長へ送った手紙を管理する等といったものです。対して広報課は、広報紙や情報番組などの作成や、市のホームページの管理が主な業務内容です。私は主に広報課の皆様とともに仕事をしていました。

私に与えられた業務は、次に発行する広報紙に誤字脱字がないか確認し校正したり、目が不自由で広報紙を閲覧することが困難な市民の方々へ送る CD のケースを纏めたり等といったものでした。次号の広報紙の特集に使うテーマを探す事もあり、市が発行する情報としてふさわしく、尚且つ市民の皆様興味を引く話題を探すことにとっても苦労しました。作業中分からないことや不安に思うことがあったら、遠慮するより分かる方に聞く、手が空いていないようであればその件についてメモを取り、時間のある時に聞いて可能であれば他の作業に回るといった基本的なこの動作こそが自分の作業を停滞せず、確実にやり遂げるために最も重要なことなのだ、私はこの研修期間中何度も実感しました。

インターンシップ期間中は、自身の行いが社会にどう響くのかを常に意識して行動するので、体感する責任感も緊張感も学生として過ごしている時とは段違いだと私は思いました。緊張は中々解けませんでした、それ以上に新鮮で貴重な経験を得られました。その中でも私が特に感銘を受けたのは、初日に役員の方が私に語ってくださった「何故これやるのか？を考えることが大事」という言葉です。単純だし当たり前の事だと思うかも知れませんが、しかし当たり前の事だからこそ忘れてしまいがちです。そして意識するようになると、問題点や改善したい点をはっきりと見え来やすいと思います。例えば私は、広報紙の校正をしている時や情報番組を見て意見が欲しいとの要望があった際に、市民に情報を伝える為の、分かりやすい物になっているかを重点として見て、気になった点を見つけ、それらを伝えると、よく見ているし、自分の意見を明瞭に言っていると役員の皆様が褒めてくださいました。もちろんあくまで個人、それも素人の意見ですが、意見を言ったことは決して無駄なことではなかったと思います。



私は、この研修期間を通して学んだことを思い出としてではなく経験として生かせるようにこれからも努力していこうと考えています。

ニュージーランドでの体験

3年 荻堂 颯

私は夏休みに10日間ニュージーランドに滞在し、活動期間1週間のボランティアに友達と2人で参加しました。今まで一度も海外に行ったことがなく、パスポートの用意や向こうでの生活の準備、チケットなど、出発するまでが色々で大変でしたが、ボランティアで夏休みに海外に行けることだけでもモチベーションが上がりました。お金はボランティアの参加費、飛行機代、持って行くお金で想像していたより掛かりました。長時間の飛行機も楽しみでしたが、いくら映画や音楽を聴けても10時間イスに座ることは大変でした。

ニュージーランドに着くと急に外国にきた感じがして感動しました。周りのスタッフも全員外国人で日本語は使えない、伝わらないというプレッシャー、どこに行けばいいのかもわからない、そんな中、片言の英語でスタッフの方とコミュニケーションをとり、バスの乗り方を教えてもらい、あらかじめ予約をしていたオークランドにあるホテルまでたどり着きました。バスの中から見える外の景色



が、日本とは違った雰囲気があり、新鮮で、それだけでも来て良かったと思えました。余裕を持ってボランティアの前日に到着したので、まずホテルでゆっくりしてからオークランド市内を歩いて回りました。市内には坂道が多かったです。開拓する時、丘を平地にせず、そのまま建物を建てたついでというぐらい急な坂道が多く、歩きづらいほどの坂道もありました。都市内にこんなに坂があることが衝撃でした。オークランドはニュージーランドの大都市と言われていて、ガイドブックの写真を見るとたしかに都会ですが、実際に行くと思っていたより都会とは感じませんでした。これは、日本の密集した都会しか体感したことがないからそう思ったのかもしれません。また、オークランドで食べた料理のボリュームが半端なく、せっかく作ってくれた料理を食べきれぬか不安になりました。

ボランティア当日は、オークランドにあるオフィス集合でした。到着前にオフィスの場所が分からず友達と2人でさまよっていると、通勤途中でスーツ姿の外国人が心配して声をかけてくれて、ニュージーランドの国民性に感動しました。そんなこともあってオフィスに集合し、1週間一緒に行動するグループのメンバーに会い、ボランティアの説明を受

けて、活動の拠点となる場所に向かいました。その途中で、スーパーで1週間自分達が食べる食材を買いました。ボランティア期間中のご飯は基本自炊で、自分達で材料をカートに入れていきました。グループメンバーはドイツ人3人、日本人4人、韓国人1人で、カートの中に文化を感じました。

車で合計1時間くらい移動して、オークランドの都市とはかけ離れた絵に描いたような田舎にやってきました。オークランドでボランティアをしようと思っていたので驚きました。説明の時に言っていたのかもしれませんが、英語での説明だったのであまり理解できていませんでした。さらにこの時オフィスにiPhoneを忘れていて、1週間iPhone無し生活することになり、自由時間は本を読んで過ごしました。iPhoneが使えない状況での読書はとても面白いと思いました。



活動拠点は大きな家で、家の中は少しほこりっぽく、大きめのソファやテーブルがおいてあり、それでもまだスペースに余裕があるほど広がったです。家の周りには何もなく、360度緑の丘が広がっていました。丘には牛や何頭もの羊がいました。活動内容は植林で、その丘から10分くらい車を走らせ、斜面がきつく地面の土が雨でぬかるんでいる場所まで行き、9時頃からお昼の休憩を挟んで16時頃まで、木を植える作業を土日を除いて1週間続けました。正直早く帰りたいと思うくらい大変な作業でした。活動を終わると自由時間になり、外出も出来ました。外に出ても丘しかないので外出はしませんでした。ボランティア活動はハードでしたが、1週間を終えると、達成感を味わえ、ボランティアできて良かったと思いました。

活動が終わり、次の日の飛行機に乗るために空港の近くにあるホテルまで向かう途中で、ニュージーランドの綺麗な街並みや、電車で話しかけてくれたおばあちゃん、タクシートの運転手など温かい人たちにふれ、ニュージーランドという国がさらに好きになりました。ボランティアの体験だけでなく、ニュージーランドでの全てのことが体験して良かったと思えました。

ボランティアに参加して

3年 三田 玲奈

私は夏の長期休暇を利用して2週間、CIEE（国際教育交換協議会）のボランティアプログラムに行きました。ニュージーランドでチャイルドケアプログラムに参加しました。現地でホームステイをしながらチャイルドケアセンターで先生の手伝いをする、というプログラムでした。そこでは貴重な体験ばかりで、学ぶことがたくさんありました。私がこのプログラムに参加して身についたことは2つあります。

まず一つ目は、周りを見て判断し行動することです。ボランティア先では先生から何の指示もされず、最初は戸惑ってしまいました。そこで、まずは子供たちと打ち解けることが大事だと思い、一緒に遊ぶことから始めました。最初は初めて見る私に戸惑っていましたが、一緒に遊んでいると子供たちと打ち解けることができました。次にしたことは今までの先生の行動を思い出しながら、次は何をすればいいのか考えながら行動することです。そうしているうちに手伝えることも増え、感謝されることが増えました。また、先生から仕事を任されることもありました。この経験から誰かの指示を待つのではなく、周りを見て自分が何をすべきか、自主的に行動することが大切だということがわかりました。

2つめは自信です。初めて一人で海外に行き、現地の人と生活しなければいけないということにとっても不安を感じていました。実際に行ってみるとホームステイ先の家族がとても

いい人達で、自分が英語でうまく伝えられなくても理解しようとしてくれたり、1度で聞き取れなかったら丁寧にわかりやすく話してくれたりしました。そのおかげで会話も弾み、自分から積極的に話すことができました。また休日もニュージーランドの中心まで電車で行き、買い物をしたり観光することができました。今までは不安で1人で行動することが苦手でした



が、今回の経験で1人で行動するのも楽しいと思えるようになりました。また海外に1人で旅行に行ったりしたいです。今回CIEEのボランティアに参加して、自分では経験したことがなかった環境で過ごすことができました。慣れない環境の中で自分はどうすべきな

のか考えて行動するなかで、自分から動かなければ周りの環境は何も変わらないということがわかりました。つまり自分から動けば周りの人は協力してくれるし、自分から何もしなければ環境は変わらないままでということです。今回の貴重な経験で身につけられた自信と周りを見て行動することを、これからの生活でいかしていきたいと思います。

自分だからこそできることを

2年 苜米地 郁穂

私はオーストラリアのビクトリア州にあるメルボルンとワーナンプールの環境保護ボランティアに2週間参加しました。オーストラリアに滞在したのは約3週間です。以前にも何度か海外に行ったことはあったのですが1人で参加し、ホームステイではなく世界中から



ら集まる多国籍の人と24時間一緒に生活、初めての寝袋、初めてのオーストラリア、そして初めての環境保護のボランティア、体験することが全て初めてのことでした。大変なことも不安なことも沢山ありました。実際、たくさんのハプニングが起きました。ですが、私がこのボランティアを通して今まで持っていなかった考え方を得ることができました。

まず、私がこのボランティアで行ったことは外来種や動物が食べ過ぎてはいけない植物の除去、植林をした後の片付けです。他のチームでは植林をしたというところもありました。活動後は滞在先に帰り皆でご飯を作ったり、フリーの時間でした。土日は作業が無い日だったので皆で観光や買い物を楽しみました。一番印象に残っている観光先はグレートオーシャンロードの夕日を見に行ったことです。初めて景色で泣くほど感動しました。2週間目のワーナンプールの野生の動物を毎日見ることができました。様々な国の人と話していると私と他の国の人の考え方の違いに気づきました。自国の歴史や政治はもちろん、他国のこともとても詳しい人ばかりでした。日本のことにもとても詳しく私より





日本のことを知っていると感じました。その時の私は、日本の歴史も政治も知識がほとんどなく何が世界で問題なのか理解していませんでした。なので、他国の人の知識量を知ったときの衝撃がとても大きかったです。その衝撃が良い刺激になり、日本に帰ってきてから意識の変化が起きました。日本の歴史、国内外で起きる問題、政治などに今まで以上に関心の中のことを知れば知るほどまだ何も知ら無いことだらけで勉強しなければいけないと思うようになりました。

オーストラリアで経験したことは私にとって大切なもので価値観や視野を広げてくれるものになりました。この経験や今までの経験をしてきた自分にしかできないことをしようと思う様になりました。そして、今までは失敗するのを恐れ、チャレンジしようと思う気持ちが薄かったのですが、新しいことにチャレンジすることで自分の知らない世界を見ることができると知ったのでこれからもっとたくさんの方にチャレンジして行きたいです。



複言語・複文化教育センターの活動報告

Meikai Plurilingual & Pluricultural Education Center (MPPEC)

Welcome to MPPEC!

Patrizia M.J. Hayashi

As English majors, MPPEC should be a central part of your learning experience. MPPEC stands for the Meikai Plurilingual and Pluricultural Education Center. In MPPEC you will find the English Zone, a self-access study center, where you can practice English conversations with friends; the common area, where you can eat lunch, study, and read the newspaper; and the Multi-Purpose Zone, where



we hold special classes and events. The foreign teachers who will instruct you in many of your first- and second-year English courses have their office at MPPEC and are available to assist you in your studies. Our goal as teachers is to create a language environment in which English comes to life. Students who make use of MPPEC by visiting the English Zone, conversing with teachers, and attending events will discover a new world in which communicating in English opens doors and new opportunities for the future.

Intensive Language Program (ILP)

This has been an exciting year for both teachers and students in the Intensive Language Program for English Majors here at Meikai University as the curriculum is being updated for 2020 for first- and second-year Listening, and second-year Writing. Integrated English continues to be improved to make it even stronger. Read below to see what has been happening in these programs in the academic year 2018-2019.

Integrated English I, II, III and IV - First and Second Year Programs

Nick Dalziel

Integrated English (IE) I-IV is a four skills language program that all students take in their first and second years. It is the main course focusing on communication skills and is extremely popular among students.

Across both first and second year IE classes in 2018-2019 students developed speaking, listening and critical thinking skills. This skill development was grounded within the topics from the Pathways series of textbooks. The themes from the textbook allowed students to develop their discussion abilities in pairs and small groups by building their knowledge of functional language skills. These skills include *giving opinions*, *giving reasons* and *giving examples* as both speakers and listeners. There continued to be a focus on spoken fluency development with teachers endeavoring to maximize the student to student communication opportunities in each class. End of unit tasks gave



First-Year Classes A, B, C



First-Year Classes D, E, F

students another opportunity to put their language skills to use while at the same time demonstrating that they had understood the themes of each unit. Using a multipronged approach of functional language knowledge, fluency development and content knowledge based tasks, students across both years were able to continue developing their language abilities. Great job, everyone!

Writing II-a/b

Tyson Rode

In Writing Class, students worked very hard to develop both their writing fluency and academic writing skills. Students practiced developing their writing fluency in writing journals. In academic writing skills classes, students learned how to organize their thoughts logically when writing in English from basic paragraph structure to larger essays on a variety of topics. Students also learned interesting computer skills that they will need for their future careers. All teachers are very happy with the progress that students have been making in the writing program. Keep up the great work, students!



Second-Year Classes A, B, C



Second-Year Classes D, E, F

Listening I-a/b

Patrizia M.J. Hayashi

In Listening Class, students spent the Spring and Fall semesters developing their listening skills. They learned to listen for the main idea of a talk and to listen for details. Keeping a Listening Log was a very important part of the Listening class. Through the Listening Log, students were introduced to several websites and apps for independent study. In fact, several students chose to continue listening to these websites and apps for their own practice! At the end of each term, students undertook a listening project, such as a presentation, acting out a movie scene, creating a podcast, and so on. Through these integrated skills projects, students demonstrated growth in their listening abilities. Remember it's important to listen to as much English as you can!

Independent Study

David R. Phillips

If you find yourself at home during a break from school or on a long train ride with some time to spare, it is a good idea to use that time to independently study and sharpen your English language skills. In fact, it is during these times when you are not in class that you have the greatest opportunity to continue expanding your English language knowledge while also reinforcing the skills you already possess. Taking time to study on your own provides you with many other great benefits as well. When you are independently studying, you have the power to choose the sources that you want to interact with and become more familiar with the kinds of sources and ways of learning that you think are most enjoyable. Whether you choose to read comic books, use language apps, social media, music, or movies and movie scripts, you are empowered with the ability to choose to learn how you would like to learn, to set and achieve your own goals, and feel a sense of accomplishment and greater motivation as your English continues to improve. If you would like ideas on what to do, talk to one of the teachers at MPPEC.



English Zone

David R. Phillips



Since reopening in MPPEC in April of 2017, the English Zone has become a great afternoon destination for Meikai University students of all backgrounds and areas of interest to come and actively engage

with the English language. In addition to offering a wide variety of conversation starter cards filled with hundreds of intriguing topics and questions, the English Zone also features an ever-expanding selection of books, graphic novels, vocabulary builders, games, music, movies, and fun activities to support English language learning in ways that are enjoyable and interactive. Students may also want to visit the English Zone to ask for extra assistance from a teacher on a homework assignment or prepare for a test, or perhaps they may want to try completing an English Zone Challenge which focuses every month on a different cultural theme through the use of vibrant pictures and apps. With all this opportunity for active engagement and ways to grow as an English speaker, there is surely something for everybody in the English Zone: come see us today!



The Intensive Course

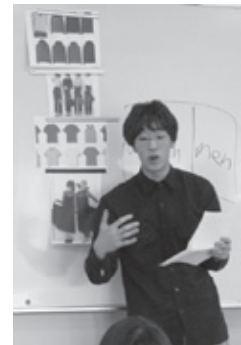
Jason Clarke



The Meikai Intensive English Course is a great way for students to get extensive practice using English. The course lasts for ten days and runs from 10am to 4pm every day so there are a lot of chances for all the students to speak English. The course is open to students from all departments in the university, so it is a good opportunity for English majors to meet students from other departments. There are six classes so students will be grouped with other students of the same level. That means the course is good for beginners

as well as more advanced students.

The classes mainly focus on speaking and listening skills. There is also a lot of new vocabulary related to the topics we study. Students learn how to give their opinions on various issues and support their opinions with reasons and examples. They also learn how to agree or disagree with other students and to ask follow-up questions.



The course ends with all the students doing presentations on topics of their choice. There are always many interesting topics covered in the presentations. The presentations are done in pairs so students don't need to feel nervous about doing a presentation alone. As well as giving their own presentations, students have a chance to listen to what other students have to say. The intensive course is enjoyable, educational, and a great way for students to improve their English.





11th All-Meikai University English Oratorical Contest

This year, the 11th All-Meikai University Oratorical Contest was held on Dec. 21st. There were a total of 10 entries, 3 in the multimodal format, and 7 in the traditional-style speech, from both the Department of English and HT. Students prepared their speeches carefully in the weeks preceding the Speech Contest. Speeches were judged by teachers from the P&P and the Department of English, according to delivery, content, and effective use of visual aids (in the case of multimodal presentations). All of the speeches were beautifully presented, with meaningful messages for the audience. Below, you will find the scripts for the winning speeches.

Multimodal Presentations: 1st Place



How Plastic Changed the World



Takaaki Kobayashi (3rd year)

Please think for a moment about how often you use plastic in your daily life. How often do you use plastic bags? How about plastic straws? Do you purchase items that come in plastic containers? Do you use pet bottles? Now, please think about where this plastic goes after you have used it. Perhaps you are uncertain about where all this plastic finally ends up. This is Katsuura, Chiba in Japan. This is one of the beaches in Bali. This is one of the beaches in the Philippines. This is what really happens. Do you know how much plastic waste goes into the ocean? According to a survey on plastic waste by the Ocean Conservancy, the amount is 8 million metric tons. Can you believe it? 8 million metric tons of plastic waste go into the ocean every single year. Earth has been devastated because of plastic, and it's killing us, too, so I dare each of you to reduce your plastic use by 50%. There are 3 reasons to make me think that way. Let me tell you those reasons from now.

The first reason is that plastic products are not recycled as we expect. Does anyone have a pet bottle right now? Can I borrow it for a minute? Thank you. So, many people think that this pet bottle will properly be recycled. But, it's just an ideal idea. Based on data from 2015 from the Council for PET Bottle Recycling, the truth is only about 20% of pet bottles are recycled in the U.S.. What happens to the other 80%? Most of the pet bottles are burned or buried in landfills.

These triangle marks are not true!! Most of the plastic products you are using daily are single-use!! As stated in the EU, the definition of Single-Use Plastic is plastic packaging or other consumer products that are thrown away after one brief use, and those are rarely recycled and easily become litter. That's how most of the plastic products we use end up.

The second reason is marine creatures have been affected by plastic waste, and many of them have died because of this. You have probably seen these pictures of a sea turtle trying to eat a plastic cup or a sea bird dying because of too much plastic waste, which they had digested by chance. Do you know how many of them die or get harmed every year because of plastic waste? As reported in a study from Plymouth University, the amount is at least 100 million marine mammals are killed each year from plastic pollution. It's approximately 15 times the population of Chiba!!!

Moreover, plastic pollution is not only affecting marine creatures, it's also polluting us, humans. There was a study conducted by a Medical University of Vienna researcher. All examinees were asked to keep a food diary for a week and record whether they had drunk water from plastic bottles and so on. What do you think the result was? All examinees were found to have plastics in their stools. This means your body is already contaminated by plastics. Plastics could flow into the bloodstream and become embedded in the vessels, causing immune reactions. It's possible that plastics could kill us. Maybe someone has already died due to a heart attack or something caused by plastics.

You might be thinking that companies and countries are working on this problem. To some extent, they are. Starbucks announced this June that they will eliminate single-use plastic straws globally by 2020. According to the BBC, McDonald's is aiming for fully recycled packaging by 2025. Moreover, this year June, there was a G7 meeting in Canada. They made a charter called the Plastic Charter, which is basically about thinking about plastic pollution more seriously. Five countries signed, but the US and Japan didn't.

If the US and Japan won't get serious about plastic pollution, then it's up to us. Each one of us must reduce our plastic waste. Sure, it might be difficult. But, if we don't act now, we will create more landfills, kill more marine creatures, and get killed by plastics. We do need to change the way we use plastic products. Otherwise, human beings and marine creatures on Earth will become extinct, seriously. Maybe someone is dying right now because of a heart attack or something caused by plastics, and the next person could be you!! Plastic is threatening our lives and the future. Each one of you has the power to change the world. When to act!? Start now. Thank you for listening.

Traditional Speeches: 1st Place



Mottainai

Yuina Tanaka (1st Year)



Can we live without food? Of course, not! We usually eat three times a day. We can eat a lot of food without any discomfort. However, there are lots of people who don't have enough food to eat and suffer from hunger in the world. Do you know Japan is one of the countries that produces the highest amount of food waste? If we Japanese didn't waste food, how many people could be saved? We should try to tackle this big issue. Have you ever heard of the expression "Mottainai"? Mottainai is a Japanese word. But now, it has become an international word, thanks to the Mottainai Movement created by Wangari Maathai, who is a Kenyan woman who received the Nobel Peace Prize for her work. Let's think about how we can eliminate food waste. I have three ways to act for eliminating food waste.

Now, I'll tell you the first way to eliminate food waste. Probably lots of people throw away rotten food because they didn't have time to cook, and especially in Japan, the expiration date is too short compared to other countries in the world. It's "Mottainai." It's not good to buy more food than we need. By planning meals carefully and writing shopping lists, we can eliminate food waste and save lots of money.

Second, eat the skin. I mean there're a lot of people who don't eat the skin of fruits and vegetables. It's "Mottainai." Food waste emits large amounts of greenhouse gases like methane. It increases global warming. The Washington Post said, 8% of total global greenhouse gas emissions come from food waste according to the UN Food and Agriculture Organization. So we can save the earth by eating the skin of fruits and vegetables. It's easy, isn't it?

Third, there're many people who suffer from hunger in the world. However, even if we know this fact, we don't try to save them. Why? We don't know the way. So I'll tell you. We often throw out extra food. It's "Mottainai." So send those foods which will expire soon to a Food Bank, and they will be delivered to people who are suffering from hunger. That's how we can save many people.

In conclusion, plan carefully, eat the skin and send food to a Food Bank! I insist that we Japanese should eliminate food waste and reduce our "Mottainai" behavior. That would save money, the earth, and people in the world. So let's move into action from today! Thank you.

Special Judges' Award

What Does It Mean to Be Japanese?



Rena Huseini (2nd year)

This year Naomi Osaka from tennis. Two years ago, Asuka Cambridge from track and field. Miss Japan 2015, Eriana Miyamoto. What do these people have in common? All these people are biracial or “hafu.” Not only that but they are also Japanese, too. I am biracial Japanese and Ghanaian and blasian, which means black and Asian. I am also Japanese. Actually, I am only Japanese. So, what does it mean to be Japanese? For some people, it means having 100% Japanese blood. But I believe that argument can no longer continue. We must rethink what it means to be Japanese.



When Naomi Osaka won the US Open this year, a BBC headline read “Naomi Osaka’s US Open Win Wows Japan.” There were even YouTube reactions in which people said they were proud to be Japanese. Similarly, this excitement was seen when Asuka Cambridge helped Japan win a silver medal at the 2016 Rio De Janeiro Summer Olympics. The Singapore Straits Times ran the headline, “Japan 4x100m relay team boasts a little Jamaican blood too, as it clinches surprise silver.” Clearly, we, Japanese felt that our country finally could compete against other countries on the world stage. But, let’s look at the case of Eriana Miyamoto. She is blasian, with an African-American father and a Japanese mother. She won the Miss Japan contest in 2015, which meant she would represent Japan in the Miss Universe contest. Unlike the athletes, her success was not fully celebrated. According to a BBC article, “critics complained that a ‘pure’ Japanese should have won.” Think about that. What does that mean?

As I’m sure you are aware, Japan is much more racially homogeneous than America. However, did you know that today around 36,000 children have one non-Japanese parent? Japan is changing. Nowadays, you may see a lot of different races around you. A digital media website, Bustle.com, stated that compared to 20 years ago, the number of foreigners coming to Japan has doubled. Given this trend, we could expect more international marriages and more biracial children. By the time you become a parent, it will be normal for there to be biracial children in the classroom. And these children will be Japanese.

Japan's population is decreasing. By 2060, the population is expected to decrease by 40 million. Prime Minister Abe intends to bring in 500,000 unskilled foreign workers by 2025. We have to help these people understand Japan because some of them may spend the rest of their lives here. The Japan of today is not the Japan of the past and the Japan of the future will not be the Japan of today. In America, Australia, Canada and England, for example, it doesn't matter where you came from. They are all American, Australian, Canadian and English. Their diverse backgrounds add to the strength of their countries and enrich their cultures. Japan must get ready for all these races coming in. There is no turning back.

We are proud to call ourselves Japanese. There is no "hafu;" there is no "pure." Each of us represents Japan in different ways, whether we have a drop of Japanese blood in us or 4.5 liters. The people I mentioned at the beginning of my speech have had a rough road, when all they tried to do was represent our country. Diversity makes us stronger and our culture richer. So, what does it mean to be Japanese? It is hard to describe, but it is the feeling in hearts that binds us together, one person to another. I think it's not about the color of our skin or where our parents came from. It's who we are. And we are Japanese.



Presenters & Judges at the 11th Annual All-Meikai University English Oratorical Contest 2018

英米語学科同窓会 明英の活動報告

学びにつながる同窓会を目指して

明英代表 川部 翔

おかげさまで、英米語学科の同窓会組織「明英」は今年で14年目を迎えます。明英では、卒業生や在学生の方々に対して、様々な活動を行っています。以下に、今年度の活動を振り返りながら、明英の事業を紹介させていただきます。

毎年6月には親睦パーティーを行っています。昨年6月のパーティーでは、会食に先立ち、小池生夫先生（元明海大学名誉教授）より、日本における英語教育政策と明海大学における取組についてのご講演をいただきました。講演は大学の図書館で行い、久しぶりに大学に足を運んだ参加者は新しくなった施設に驚いていらっしゃいました。親睦パーティーはホテルエミオンで行いました。東京ディズニーリゾートのペアチケットも当たる抽選会は毎年盛り上がります。

12月には、教職課程を履修している学生に対して、「教職課程卒業生との交流会」を実施しています。卒業生として、在学生に対して何か役立つことはできないか、というところからこの企画はスタートしていますが、今年度に関しては、まだ入学して間もないフレッシュな1年生から、教育実習を終えた4年生まで、多くの在学生に参加していただきました。卒業生はアドバイスを送る立場ですが、最新の英語教育を学んでいる在学生から多くの刺激をいただいたように思います。今のところ、教職履修の学生向けのイベントがメ



インですが、ビジネスや翻訳・通訳など、様々な分野の卒業生と在学生とのコラボレーションができればと考えています。また、12月には、毎年クリスマスカードも各会員にお届けしています。

2月には、多くの会員の方に対して様々な学びを提供する目的で、教育セミナーを実施しています。今までは、いわゆる「英語教育」に特化した内容で行っていましたが、今年度は不動産学部の卒業生に依頼し、ライフプランニングセミナーと題し、今後の生き方、働き方について考えを深めることができました。明英は以上のような事業を中心に運営しております。今後とも、会員の皆様の心が温まり、学びを得られる同窓会組織を目指してまいります。引き続き、ご支援をよろしくお願いいたします。

卒業生からの手紙

近況報告

2006年度卒業生 佐々木 綾香

私は2016年度に明海大学を卒業し、現在千葉県の公立高校で臨時的任用講師として働いています。また今年千葉県教員採用試験に合格し、来年度から本採用となりました。大学に入学する前から教員を志しており、いよいよ夢が叶い、教員人生のスタートラインに立てていることを嬉しく思っております。

現在は高校二年生の副担任、バレーボール部の顧問を担当させていただいています。毎日どのように生徒たちと関われば、彼らのためになるのかと奮闘しております。大変なこともありますが、生徒たちの成長を間近に感じられてやりがいを感じています。

在学中は、高い英語力を持っていることに越したことはないと考え、登下校中は英検やTOEICの単語帳を広げ、図書館では英字新聞を読んだり、パソコンを借りてCNN10やTEDを見たりと授業外でも英語に触れる機会を増やしました。また「教員に求められる英語力」とは何かを意識していました。それは中高生が分かる優しい英語でコミュニケーションを取れることだと思っていました。「英語の授業が基本的に



英語で行うこと」とあるように、授業内で分かる英語のインプットを生徒たちに多く与えなければなりません。より分かりやすく、簡単な表現は何かをノートにまとめたり、身の回りのものは英語ではどのように表現するのかなど気が付いたとき考えていました。

勉強面以外では、社会勉強の一環として大学一年生の春休みにホテルのベル係としてインターンシップに参加させていただきました。当時も教員という仕事しか眼中になかったのですが、インターシップを通して様々な世代とコミュニケーションの方法や相手が求めていることなど多くのことを学ぶことができました。また大学二年生の時にはフロリダ短期留学に参加し、異文化を学びました。他にも明海大学で大変熱心な先生方に巡り合えました。困ったことや分からないことがあった時には、優しく手を差し伸べてくださり、モチベーションにも繋がりました。

大変なこともありましたが、夢に向かって明海大学で勉強できてよかったと改めて思います。在学生の皆さんも、長いようであつという間に終わってしまう4年間に様々なことに挑戦し、今しかできない後悔のない大学生活を送ってください。



編集後記

「英米ジャーナル」第15号(2018年度号)をお届けします。ご投稿頂きました皆様には、この場を借りて御礼を申し上げます。

英米語学科では、昨年度から「卒業研究」が必修となり、4年生全員が卒業論文や卒業レポート、あるいは、それに代わる発表を仕上げることになりました。従って、本年度からは、卒業論文や卒業レポートのテーマをゼミごとに掲載しています。3年次の「専門領域研究講座」からの約2年間、学生ひとりひとりが興味のあるトピックを見つけ、深く掘り下げた成果となりました。

また、昨年度と同様、海外英語研修、フィールドワーク参加報告、複言語・複文化教育センターの活動報告、英語スピーチコンテスト報告など、それぞれの学生の貴重な体験記も素敵な写真とともに掲載されています。今後、参加を考えている皆様の参考になれば幸いです。

これからも「英米ジャーナル」が英米語学科の軌跡として皆様の心に刻まれていくことを望んでいます。

2018年度「英米ジャーナル」編集委員会 熊谷学而, 内藤貴子

2019年3月発行

明海大学 外国語学部 英米語学科

〒279-8550 千葉県浦安市明海1丁目

明海大学浦安キャンパス

TEL 047-355-5111 (代表)

印刷：佐藤印刷

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-10-2



(2018年度・米国UCLA ロサンゼルス ベニスビーチにて)